あなたの持っている本当の力

超越神力

PART—3

完全なる絶対なる神の叡智、漏尽通

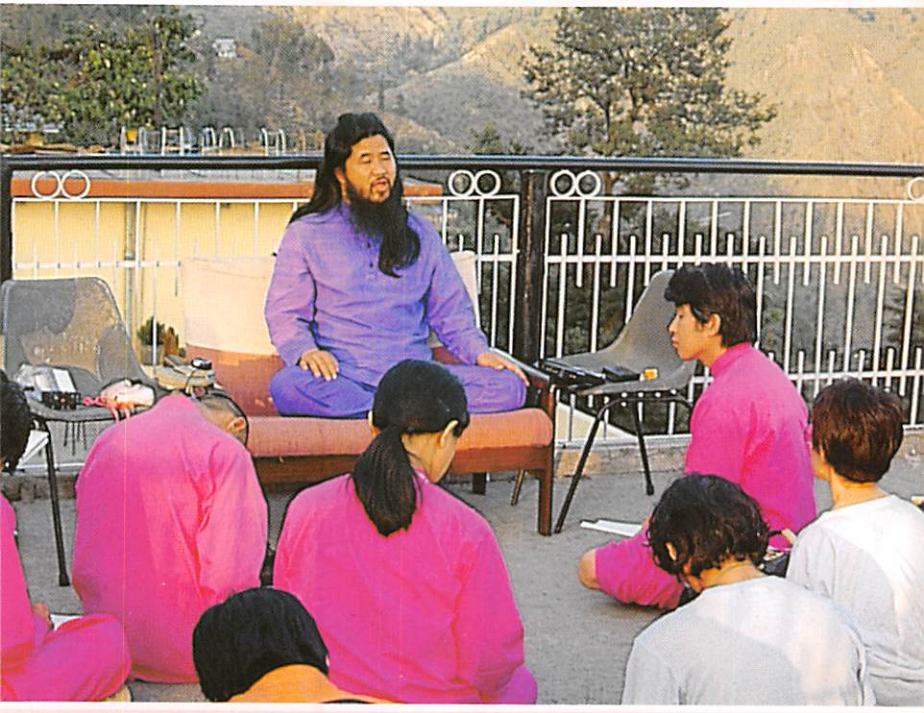
麻原彰晃

あなたの持っている本当の力

超越神力

PART—3
完全なる絶対なる神の叡智、漏尽通

麻原彰晃



高弟たちに真理の法則を説く尊師。人智では計り知れない神秘力で、尊師は弟子たちを解脱へと導いていく。

はじめに

仏教の修行によって煩悩を捨断し、心をどんどん透明にしていくと、真我（本当の自分）が本来持っている神秘的な力が発現する。それが超越神力である。

超越神力には六つの種類があり、その内容は次のようになる。

- 神足通（空中浮揚やテレポーテーションを行なったり、高い世界へ飛んだりすることのできる能力）
- 天耳通（神々の声を聞いたり、遠くの音を聞いたりする能力）
- 他心通（他人の心を知る能力）
- 宿命通（前生を知る能力）

・天眼通（一般に遠隔透視能力といわれているが、これは北伝系仏教の間違いであって、実際には南伝仏教のいう死生智のこと。死生智とは転生先を知ったり、生きながらにしていろいろな世界とつながる能力）

・漏尽通（完全なる絶対なる神の叡智）

この中の最後の超越神力、それが漏尽通なのである。

この漏尽通によって、わたしは弟子の煩悩を見抜き、カルマを知り、一人一人に合わせた指導をしている。弟子の中から多くの解脱者が出ているのも、わたしがこの力を使って導いているからである。

すなわち、漏尽通こそはグル（宗教上の指導者）の条件なのだ。

なお、天耳通・他心通・宿命通・死生智については既刊の『超越神力PART1 天耳通・他心通』『超越神力PART2 前生を知れ！

死生智の秘密』で紹介しているので合わせてお読みいただけたら幸いである。

一九九一年冬

麻原彰晃

『超越神力RART1　天耳通・他心通』（オウム出版）　九八〇円

『超越神力PART2　前生を知れ！　死生智の秘密』（オウム出版）　九八〇円

CONTENTS

目次

超越神力

あなたの持っている本当の力

PART3 漏尽通

はじめに ―― 1

第一章 最後の超越神力

●第一話 仏典に見る漏尽通 ―― 9

●第二話　弟子に語る漏尽通獲得への道——36

第二章　漏尽通、それはグルの条件

◆その一　わたしはこのようにして弟子を導く——94
◆その二　弟子が体験したグルの漏尽通——121
◆その三　会った瞬間すべてを見抜く〈質疑応答編〉——130

第一章 最後の超越神力

今回は漏尽通について話したいと思う。この漏尽通は、漏尽智とも、漏尽証解智とも、また漏尽精通智ともいう。この漏尽通は、最後の超越神力ともいうべきものであり、また、グルの条件でもある。グルとは、精神世界の指導者、宗教上の指導者を指す。その条件に合うとは、すなわち、諸現象をありのままに見つめマハー・ムドラーをかけることができること、自己の煩悩を破壊することができ、他の人の煩悩を破壊することができる状態であるということである。

この条件を満たしていない限りグルと呼ぶべきではない。マハー・ムドラーというのは、他の人の煩悩を破壊するためのタントラ・ヴァジラヤーナ的手法の一種であるが、これについては後にまた詳しく触れることになろう。

まずこの第一章では、第一話でサキャ神賢（釈迦牟尼）が説かれた経典をもとにこの漏尽通について分析し、第二話ではわたしが直弟子たちに対して説いた説法と質疑応答をそのまま掲載したいと思う。

第一話　仏典に見る漏尽通

◉「四つの絶対的真理」に対する精通

それでは、まず仏教経典ではどのように漏尽精通智について説かれているかを見てみることにしよう。出典は『出家修行者果報経』である。

「大王よ、ちょうど同じように、向煩悩滅尽多学男がこのようにサマディに入り、心は欠点がなく浄化され、情欲はなく、煩悩を増長させるものを消滅して、柔軟で、役目に適し、集中継続して、不動を得たとき、彼は漏の破壊精通に心を定め傾注するのです。

彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解します。また、『これらは漏である』と如実に認識し理解し、『これは漏の生起である』と如実に認識し理解し、『これは漏の滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは漏の滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解します。

そして、このように気づき、このように見ることによって、愛欲漏から心は離解脱し、生存漏から心は離解脱し、非神秘力漏から心は離解脱し、離解脱において離解脱したという精通が生じ、『生は破壊され、神聖行（しんせいぎょう）を果たし、なすべきことをなし、この世に存在することにおいて求めることはない』と認識し理解します。

大王よ、これは、現実に利益をもたらす出家修行者の果報であり、前の現実に利益をもたらす出家修行者の果報よりも、より素晴らしく、より極妙なのです。

大王よ、この現実に利益をもたらす出家修行者の果報よりも、より優れより極妙な現実に利益をもたらす出家修行者の果報が、他にあることはないのです。」

この経典の内容を見ていただけたらおわかりになるとおり、この漏尽通というものは、「四つの絶対的真理」に対する精通ということになる。

この四つの絶対的真理とは何かというと、「苦しみ」「苦しみの生起」「苦しみの滅尽」「苦しみの滅尽に至る方法」の四つである。この四つの説明に入る前に、まずこの漏尽通について少し詳しく解説してみよう。

◉最高の神通力、漏尽通

「大王よ、ちょうど同じように、向煩悩滅尽多学男がこのようにサマディに入り、心は欠点がなく浄化され、情欲はなく、煩悩を増長させるものを消滅して、柔軟

で、役目に適し、集中継続して、不動を得たとき、彼は漏の破壊精通に心を定め傾注するのです。」

この一節は漏尽通の状態を説明しているのである。

「心は欠点がなく」とはどういうことかというと、「心において屈折、あるいは慢、あるいは嫉妬等の心のけがれというものがない」ということを表わしている。それゆえに心が浄化され、現象に対して正確に認識する力を有していることを表わしている。

そして、「情欲はなく」。この情欲というものはわたしたちを欲界に縛りつけたり、あるいは欲界の方向にわたしたちを向かわせる心の本質、つまり、煩悩の本質であるが、これも完全に止滅する。

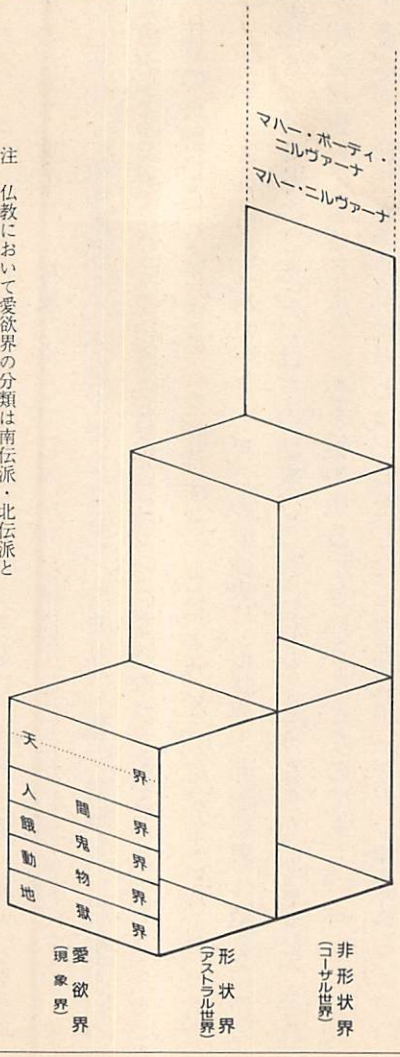
そして、この煩悩が止まった状態から、それを増大させるものを完全に静止した状態、それが「煩悩を増長させるものを消滅して」という言葉で表わされている。

しかも、「柔軟で、役目に適している」、これはどういうことかというと、観念にとらわれていず、諸現象をありのままに見つめ、四つの絶対的真理をしっかりと見つめることができる状態を表わしているのである。

ただ、この状態だけでは結果を得ることはできない。これは何においてもそうなのだが、集中し、対象に対してしっかりと精通することが必要なのである。そのために、「集中継続し、不動を得たとき」、つまり、「集中継続し、対象をしっかりととらえたとき」ということをここでいっているのである。

「漏の破壊精通に心を定め心を傾注する」とはどういうことかというと、「わたしたちのエネルギーが漏れ、そしてこの愛欲界・形状界・非形状界へ至るための原因をつくるもの、あるいはその結果、これに対してそうならないように、それを完全に止めてしまうように心を集中する」ということなのである。

愛欲界・形状界・非形状界とは、わたしたちの真我が三グナと呼ばれる三つのエネルギー（ラジャス・タマス・サットヴァ）に干渉されて、絶対自由・絶対幸



注　仏教において愛欲界の分類は南伝派・北伝派という二つのタイプがある。そして、この図は南伝派の考え方によった。詳しくは、オウム出版刊・『マハーヤーナ』NO31「ダルマ&ダルマ――マハー・ムドラーへの道」参照。

福・絶対歓喜の世界から落下することによってつくられた世界である。そして、現在わたしたちは、一番粗雑な愛欲界の下から四番目に位置する人間界に生きているわけである。

◉すべては苦しみである

次からは「四つの絶対的真理」、漢訳では「四諦（したい）」と呼ばれている部分の説明である。ここは大変重要なので、少し突っ込んで説明をしたいと思う。

まず、「『これは苦しみである』と認識し理解する」。これはどういうことか。それは、「諸現象のすべてが、もし煩悩というものを肯定しながら接するならば、それは必ず苦しみの要因になる」ということなのである。そして、その苦しみの要因というものは、必ず生起する。

例えばである、ここにおいしいカレーがあると。このおいしいカレーは、わた

したちの味覚を満足させてくれると。しかし、例えばそれを食べ続けると、ガンになりやすいと一般的にいわれている。これは、そのおいしいカレーに対してとらわれ、食べ続けたがために、結局ガンという苦しみを生起させることを表わしている。では、ガンの因は何かといったら、それはカレーなのである。これが苦しみと苦しみの生起なのである。

このカレーにおいてもわかるように、すべての現象は苦しみであり、そして、その現象にとらわれることによって、必ず苦しみは生起するのである。

別の例を挙げてみよう。ここに幸せな結婚をしたカップルがいると。この幸せな結婚をしたカップルは、お互いに愛着する（とらわれる）と。しかし、どちらかが死ぬと。死ぬときは、その死ということによって生き残った方は苦しまなければならないと。あるいは、死んだ者も、死後バルドーで苦しまなければならないと。では、この苦しみの原因、苦しみとは何かというと、それは愛し合ったこと、あるいは結婚なのである。

つまり、ここでも一般的にいわれている喜びが苦しみとなり、そしてその苦しみは必ず生起するのである。

では、もう少し具体的に他の例を考えてみよう。ここに、絶えず試験で一番を取っていた人がいたとしよう。この人は、一番を取ることで満足をしていた。ところがあるとき、級友に負け二番になったと。この人はそこで、当然苦しまなければならない。では、なぜこの人に苦しみが生起したのか。それは、試験において一番を取り続けるということに愛著したがためである。つまり、試験において一番になったことそのものが、苦しみの原因なのである。

このような形で、すべての現象は苦しみであり、そしてその苦しみというものは生起するのだということを理解しなければならない。

◉苦しみは必ず生起する

ではである、例えば、この一のカレーの例、二の結婚の例、三の試験の例について苦しまない方法があるのだろうかと検討してみよう。

まず、一のカレーの例だが、カレーそのもの、カレーの性質を理解するならば、例えばカレーと相反する、肉体に対して作用のあるものを同じように取ることにより、そのカレーの害をなくし、それによって、味覚だけを味わうこともでき、ガンにもかからない。つまり、ガンにおける苦しみの生起はそこで止滅することになる。

しかし、この場合、例えば、今までカレーを食べることによって味覚を満足させていた者の、カレーを食べられなくなったときの苦しみというものは止滅しない。ということは、結局、カレーの味覚にとらわれてはいけないということになる。

では、第二の例を検討してみよう。第二の例は結婚である。この結婚は、相手に愛著しなければ死後苦しむことはない。しかし、もともと愛著しないんだったら、結婚する必要もないということになる。

ということは、結局結婚しない方がいいということになる。よって、神聖修行者は結婚しないのである。

かくいうわたしは、迷妄にとらわれたゆえに結婚してしまった。まあ、わたしの弟子の中でも、迷妄にとらわれたがゆえに結婚してしまった者も多くいるのだが、これは哀れでならない。

第三の例である。もし、彼がただひたすら自己を高めるために勉強をし続けるならば、彼はその結果として一番になろうと二番になろうと苦しみは生起しないはずである。しかし、彼は一番になるということによってとらわれたがために苦しみが生起したのである。ところでである、もし、彼がその向上欲求を遮断されてしまったらどうであろうか。もちろん、そこでも彼には苦しみが生じるだろう。

よって、ここで考えなければならないことは、ただ目の前にあること、これに淡々と努力する。それさえ行なっていれば、彼においては苦しみが存在しないし、苦しみは生起しないのである。

これらの三つの例からわかるとおり、すべての現象はわたしたちが愛著することにより、苦しみとなり、そしてその苦しみは、必ず生起するのだ。いかなる現象においても必ず生起するのだということを如実に理解することができるようになるのである。

◉苦しみは滅尽できる

では次は、苦しみの滅尽とはどうであろうか。この苦しみの滅尽とは、愛著しないということになる。

では、この愛著しないということはどういうことであろうか。その前の渇愛を

生じさせないということである。

渇愛を生じさせないとはどういうことであろうか。これは、感覚の喜び、あるいは意識の喜びを完全に生じさせないということである。

では、意識の喜び、感覚の喜びを生じさせないとはどういうことであろうか。それは、完全に心を空（くう）の状態へ持っていくということである。

では、心を空の状態へ持っていくとはどういうことであろうか。それは、対象に対する識別、これを完全に捨断（しゃだん）してしまうということなのである。

では、識別を捨断するとはどういうことであろうか。これは、経験、今までの経験におけるリアクション、つまり経験から生じる行為、これをすべて止めてしまうということなのである。

では、経験における行為すべてを止めてしまうとはどういうことであろうか。それは現実、この現実というものを完全に真理にかなって見、そして、超越するということなのである。

◉苦しみを滅尽する方法

そして、これらの道、これらの方法こそが、滅尽に至る方法である。では、滅尽に至る方法について検討してみよう。この滅尽に至る方法は、まず証智、正しい知識が必要である。その正しい知識とは、できるだけ多くの正しい教えを聴くということである。

このできるだけ多くの正しい教えを聴くということはどういうことかというと、例えば今述べたように、カレーの例、結婚の例、学業トップの例、これらをしっかりとまず聴き、一般にいわれているカレーはおいしいから食べようというコマーシャルに乗っかる生き方を選択するのか、あるいはそうでない、この本に説かれているような生き方を選択するのかをしっかりと決める。結婚についても、そして、学業トップについても同じである。

これを理解することができた人、その人が、正しい知識、証智が生じた人とい

うことができる。この正しい証智が生じた人は、それにより多くの教えを学び、そして見解を具足する。この見解とは真理にかなった見解を具足するということである。

次に、真理にかなった見解を具足する人は、この人間の世界から高い世界へ至るためにはどのようにしたらいいかを考える。まず、形状界の神々、あるいは欲界でも、最高位の戯れ堕落天の最高位の神々、その魂がどのような心を持ち合わせているのかと。

例えばである、最高位の神々はカルマの法則を信じるであろうか、信じないであろうか。当然、彼らはカルマの法則を信じるではなく、カルマの法則を実際に見、経験していると。とするならば、わたしもカルマの法則を信じようと。

次に、最高位の愛欲神の神は他人を害する心を持ち合わせているだろうか。これは持ち合わせていない。とするならば、わたしも他人を害する心を持ち合わせるのをやめようと。最高位の愛欲神の神は、残酷さを心に持ち合わせているだろ

うか。いや、これは残酷さを持ち合わせていない。とするならば、わたしも残酷さを持ち合わせるのをやめようと。

このような形で思惟するのである。

次に、最高位の愛欲神はこの苦しみの世界に生まれ変わることを喜んでいるだろうか、それとも、それよりも高い世界で、すべての喜びにひたる生き方を望み、それを実践しているだろうかと考えてみる。当然、すべての喜びにひたり、満足する生き方を望んでいるのである。よって、わたしもそのようにしようと。このような形で、日々、心にそれを培う。

そして、言葉においては、神は嘘をつくであろうかと。いや、嘘をつかないと。神は軽薄語や必要のない言葉を話すであろうかと。いや、必要でない言葉、軽薄語を語らないと。神は悪口を言うであろうかと。いや、悪口を言わないと。神は仲たがいさせる言葉を言ったり、あるいは中傷するであろうか。仲たがいをさせる言葉、あるいは中傷は言わないと。ということは、わたしもそれをやめようと

考える。

そして、神は、慈愛のこもった言葉を語るであろうかと。神は当然語ると。神は、聖哀れみのこもった言葉を語るであろうかと。当然語ると。神は、素晴らしいものに対して称賛するであろうかと。当然称賛する。だとすれば、わたしも慈愛のこもった言葉を語ろうと、そして、聖哀れみのこもった言葉を語ろうと、そして、称賛の言葉を語ろうと考える。そして、それを実践すると。

そして、神は生き物を殺すであろうかと。いや、殺さないと。すべてはカルマの法則に従って裁かれるのであって、意図的に殺すことはしないと。そして、自分自身がそのカルマの法則以上のことをなそうとはしないと。

神は、人のものを盗むであろうかと。それとも、恵みを垂れるであろうかと。神は、恵みを垂れると。

神は、人の妻を寝取るであろうかと。あるいは、神聖世界の神は性的交わりをするであろうかと。確かに、欲界の神は多くの美しい女神たちに仕えられ交わり

をなす神もいるが、人の妻を寝取ることはしないと。神聖天の神は、性的交わりをしないと。ということは、わたしは欲界の神に生まれ変わる場合、与えられた女性で満足し、神聖天へ至ろうとする場合、異性を捨断しようと。

そして、これらの法則に従って生きる。神は、一日一日を怠惰に生きているだろうかと。確かに、低い神はそうかもしれないが、高い神は怠惰には生きていないと。すべての衆生のため、すべての生き物のために絶えず心を配っていらっしゃると。よって、わたしも一日中、すべての魂のために生きようと。

神は、今の自分自身に満足していらっしゃるだろうかと。いや、満足していらっしゃらないと。例えば、自分の欠点があれば、その欠点を直そうと努力なさっていらっしゃるし、あるいは、直した欠点を確実にしていらっしゃると。

また、自分の長所をよりいっそう伸ばそうとしていらっしゃるし、まだ自分には備わっていない、他の偉大な神が有している長所を備えようと一生懸命努力していらっしゃると。よって、わたしも、今自分にある欠点を取り除き、既に取り

除いた欠点を決して生じさせないようにし、今ある長所をよりいっそう増大させ、まだ自分に備わっていないが、神々に備わっているような偉大なる長所を自分の中に備えようと考えると。

では、これらのことを踏まえた上で、神はよりいっそう高い世界を絶えず思念し続けていらっしゃるだろうかと。そのとおりであると。だとするなら、わたしも、この人間よりより高い世界を絶えず思念し続けようと。そして、それらの七つの結果をサマディによってしっかりと認識しようと。そして、今自分で実践していることが正しい結果を得ているかどうかを確認しようと。

この四つのプロセス、つまり、苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る道、つまり苦しみの滅尽に至る方法、これを正確に自分の内側に体現した者、これが、漏尽精通智を得た者といえるのである。

◉〝漏〟を理解する力

では、経典を続けて見てみよう。

次に、この漏尽精通智に到達した者は、まず、現象において、これはエネルギーを漏らすものである、低い世界へ転生するものであるということを理解する力を得る。

次に、その漏が生起する有り様をありありと理解するのである。例えばである。ここにカップルがいた。このカップルは、いまだ互いをあまり理解していなかった。ところが、何度かすれ違ううちに会話をするようになった。そして、お互いがお互いに好意を持つようになったと。

あるとき、男が女をデートに誘った。そして、一緒に公園を散歩し、帰った。二回目のデートに誘ったと。次は映画である。そして、映画の帰りに食事をし、帰った。三回目にデートに誘った。次は喫茶店である。そしてその後、帰りに何

となく男の方が女の手を握り、そして、拒絶されることなく帰った。四回目にデートしたと。それは林であったと。そこで男は女を抱きすくめた。これが、漏・漏の生起のプロセスである。

つまり、欲望というものは、一つずつ増大し、そしてそれにより対象にとらわれるようになると。そして、対象にとらわれるようになるがゆえに心はそこに集中し、そして愛欲という定義の世界に固定されていくのである。

ではである、この抱きすくめた男性が、例えば正しい仏教書や、あるいは正しい真理の本を読んだと。それにより、彼は考えたと。「わたしのプロセスは渇愛のプロセスである」と。「そして、既に対象に対して愛著が生じている」と。「この愛著ともとらわれともいわれている状態から脱却しない限り、わたしは未来において苦しみを生起させ、そして苦しまなければならない」と。「よし、では、彼女について検討してみよう」と考える。

そして例えば、そこで不浄観、あるいは四念処（身体・感覚・心・観念につい

て証智し、離れるための瞑想）等の瞑想を彼が行なうことにより、心が少しずつ少しずつ、とらわれ・愛著から解放されてくるならば、その逆のプロセスをたどるであろう。これが漏の滅尽であり、漏の滅尽に至る方法なのである。

◉完全なる自由——離解脱

次に話を進めよう。

「そして、このように気づき、このように見ることによって、愛欲漏から心は離解脱し、生存漏から心は離解脱し、非神秘力漏から心は離解脱し、離解脱において離解脱したという精通が生じ……」

これは、大変難しい言葉が出てきた。まず愛欲漏とは、この欲界へ転生することを表わしている。つまりどういうことかというと、「漏」とはよく考えていただきたいのだが、もともと真我はマハー・ニルヴァーナに存在していたと。大ニ

ルヴァーナに存在していた。この真我が道をつくったわけである。その道をつくるというのは、この愛欲の世界へ道をつくったわけである。道をつくるとはどういうことかというと、この真我と、それから愛欲の世界とが一本のホースで結ばれたと考えたらよろしい。

そこから漏れると。漏れるということはそこに生存するということなのである。ということは、この愛欲の世界の漏れが破壊される、つまり、道が破壊されるということは愛欲の世界に生存しないということになる。

次の生存漏というのは、これは形状界に生存しないということなのである。

そして、次のその「非神秘力漏」というのは、それは非形状界のことなのである。この愛欲漏・生存漏・非神秘力漏、これから離解脱するということは、離れ、解放されるということなのである。

そして、離解脱が生じてくると、自分自身はそこから完全に解放された、全く無関係であるということがわかるのである。これはどういうことかというと、例

えば手に粘土が付いていたとしよう。手に粘土が付いていて、その粘土を取り払ったら、手と粘土とは別であるということがわかる。このような形で、離解脱をすると完全にグナと真我との関係が別であることが理解できるのである。

少し詳しく説明しよう。グナと真我とが別であるというのは、もっとわかりやすくいうならば、例えば、煩悩と自分の本質とは別であるということが理解できるということなのである。

例を挙げるならば、綺麗に磨き上げられた鏡に何か現象を映すと。そうすると、その鏡には現象が映る。例えばである、綺麗な鏡がある。そこに美しい女性が映ると。そうすると、美しい女性が鏡に映されたということが鏡を見ている人にわかる。しかし、その女性が離れると、鏡には何も映らないと。

例えば、同じように性欲があるとするならば、性欲のエネルギーを持っている人が近づいたら、性欲を持っている人が近づいてきたんだということが理解でき、そしてその人が離れたら、また離れたんだということが理解できるのである。こ

れが離解脱なのである。

◉漏尽通はグルの条件

「『生は破壊され、神聖行を果たし、なすべきことをなし、この世に存在することにおいて求めることはない』と認識し理解します。」

先程も述べたとおり、真我の独存位、つまり一元の世界に存在する限り、わたしたちは不死である。そしてその状態においては、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜という三つの状態を持ち合わせている。その状態から一切動かない状態、固定された状態に入ると、この愛欲界・形状界・非形状界に転生することはない。これを「生は破壊され」というのである。

「神聖行を果たす」とは、それにより神聖世界以上の世界へ転生し、そして煩悩破壊することにより真我の状態へ戻ることを表わしているのである。

そして、その状態に入ると、もう一切この世でなすことはない。つまり、これは学ぶことを超越した状態、すべてを知った状態といわれる状態に入り、そして、この世において何も求めるものがなくなるのである。それが、「この世に存在することにおいて求めることはない」ということなのである。

「大王よ、これは現実に利益をもたらす出家修行者の果報であり、前の現実に利益をもたらす出家修行者の果報よりも、より素晴らしく、より極妙なのです。

大王よ、この現実に利益をもたらす出家修行者の果報よりも、より優れより極妙な現実に利益をもたらす出家修行者の果報が、他にあることはないのです。」

そして、この漏尽精通智こそ、最終段階なのである。なぜならば、すべての現象をありのままに理解し、そしてそれにより、真に幸福な道をパーフェクトに選択することができるからである。

ところで、である。最初に述べたように、これはグルの条件なのである。では、グルの条件とは何であろうか。それは、弟子たちの煩悩を正確に見つめ、その煩

悩の破壊をなす方法を全智する、すべて知り尽くす、知り尽くしている魂、これがグルなのである。それで、そのようなグルに巡り合うことができたならば、何万カルパ、何十万カルパとかかる長きにわたる修行も、わずか一生においてそのすべてを達成することができるのである。

第二話　弟子に語る漏尽通獲得への道

◉偉大なる神となるために

君たちは、水によって何かの形を固定させることができるかな。もちろん水によって固定させる場合、それを強烈に冷却し、そして形作るか、あるいはその外枠を作った上でそこに流し込むか――しかし、まあ、その場合は固定とはいわないけども――それしかないと。

これと同じように、わたしたちがわたしたちの目的を達成し、例えば偉大なる人となる。あるいは、偉大なる意識堕落天の神となる。あるいは、偉大なる戯れ堕落天の神となる。あるいは、偉大なる神聖天界の神となる。あるいは、偉大な

る光音天界の神となると。あるいは、偉大なる総美天の神となる。あるいは、偉大なる超越童子天の神となると。あるいは、偉大なる空無辺境の神となると。あるいは、偉大なる識別無辺境の神となると。あるいは、偉大なる無所有境の神となると。あるいは、偉大なる非認知非非認知境の神となると。あるいは、大完全煩悩破壊し、十力者（じゅうりきしゃ）へと至ると。

これを目的とする場合、まずしっかりと枠組みをつくり、そしてその枠組みに対して自分自身を当てはめる作業が必要となってくる。

例えば、同じ形状の絵――ま、ここではわかりやすいように塗り絵にしようか――同じ形状の塗り絵を、同じ色合いで、そして同じバランスでかくとする場合、それは配色にしろ、あるいはかくポイントにしろ、それは全く同じでなければならないということになる。これは、何を意味するのかというと、先程の水のたとえと同じである。

◉仏教的センスのない国——日本

実は、『月刊宝石』という雑誌があって、その雑誌で幸福の科学とそしてオウム真理教が叩かれていたと。もちろんその叩かれ方は十対一ぐらいであったわけだけども、その一の内容が大変ひどいものであったと。

で、その叩いている相手はだれかというと、佐伯真光という人と、それからもう一人はあまり有名じゃない東北学院大学の教授であったと。で、この佐伯真光という人は、実はわたしは以前『週刊ポスト』で対談したことがあり、彼の宗教性——というよりも、彼は真言宗の僧侶であり、大学教授なわけだけども、ま、本も何冊か書いているという有名な人ということだったわけだけども——そのあまりの仏教的センスのなさにあぜんとしたものである。

そして、今回同じように、彼は堂々と霊界については不可知論であると。そして仏教徒というものはそうなんですよという発言をし、オウム真理教の批判の一

を担った。

わたしはそれを読んで、「大変情けない国だな、日本は」と感じた。それはなぜかというと、この霊界こそ、実はわたしたちがプレータ、餓鬼の世界であるといっていた世界だからである。

◉コンピュータ・ゲームに熱中する者は餓鬼の世界へ

実は、わたしが初めに、コンピュータ・ゲームを一日中している者がどんな世界へ転生するかという質問をしたのは、その結果がこのプレータの世界へ転生するんだということをお話ししたかったからである。

なぜコンピュータ・ゲームに熱中している者がプレータ、低級霊域へと転生するのかと。

もともとこの低級霊域というのは、人間の世界というもの、あるいは具体的な

世界というものを嫌がる魂の性質を持っているものが転生する世界である。そしてそれでいて、貪りが強いと。では、コンピュータ・ゲームを見た場合どうかというと、そのコンピュータにずっと張りついて人間嫌いとなると。そして、そういうイメージの世界で遊ぶこととなると。つまり、同じなんだね。

◉人食い鬼神のペット——餓鬼

では、なぜこのプレータ、イコール低級霊域という結論を下すことができたのかの経緯について話さなければならない。これは具体的には、かなり詳しく『えんじょい・はぴねす』今月号の「色別恋人判定法」の最後の部分に載っているから、まあこれはみんなに配られると思うから、見ていただきたいんだけども。

その中でも述べてるとおり、まずわたしは、実は一昨年、マハー・ケイマ正大師が第一天界の人食い鬼神の女神として転生した、転生するというかね、そうい

うヴィジョンを見たわけだ。で、そこであるサマナがペットとして餓鬼として飼われていたと。ま、この話は知ってる人がいるかもしれない。

で、わたしとしてはちょっと疑問を持ったわけだ。なぜ、人食い鬼神のペットとして餓鬼が飼われなければならないんだろうかと。というのは、餓鬼の世界は下から三番目の世界であり——ま、二番目という説もあるが、それはどちらでもいいわけだけど——人食い鬼神の世界、天の世界は、当然人間より上位に属するわけだから、その接点が見い出せなかったと。

そこで、わたしとしては疑問を持ち、ま、それについてはあまり詳しく話をしなかったわけだけど、実は『南伝大蔵経』を調べていくうちにこういう一説があったわけだね。

まず、この人間の一つ下の世界は、正確に訳すると低級霊域と訳することができると。そしてそれは、プレータ、日本の言葉でいうなら餓鬼というふうに表現されると。で、この餓鬼は何かというと、人食い鬼神に仕える魂であると。つま

り、人食い鬼神の、ま、要するに侍者、あるいはそうだね、人食い鬼神の下男、これが餓鬼だったわけです。

ということはおやおや、これは面白いことに気づかされたぞとわたしは考えた。じゃあ何が面白いのかというと、やはりオウム真理教が今まで唱えていた現象界、アストラル世界、コーザル世界のこの三つの流れというものは間違いなく存在するし、それが仏典で実際うたわれていたんだと。

つまり、君たちもわかるとおり、この低位の霊域というのは、これはつまり下位アストラルの世界であったと。そして、その下位アストラルの上に以前わたしは天界の一部が存在するという話をしたことあるよね。覚えてるかな。その下位アストラルの上部に天界があるんだよという話をしたよね、一部。これがまさに人食い鬼神たちが住む世界であったと。

そしてまあ人食い鬼神は、その下位アストラルから当然この現象界へ身を現わすことができると。なぜならば、人を超えた存在だからであると。ところが、餓

鬼は人間より下位の存在であるから、ま、人食い鬼神の下男としては使われるが、彼らが転生する世界はだいたい、次に人間か、あるいは動物へと転生することになる。

つまり、中間状態と一般にいわれている四十九日だけではなく、その四十九日以上に霊界へ存在する場合、それは霊としての生存であるとチベット仏教でいうわけだけど、この霊としての生存こそ、イコール餓鬼としての転生であったということです。

ま、この区別については、おそらくチベット仏教ではまだ完璧になされていないんじゃないかと。つまり餓鬼と、それからプレータ、低級霊界とは別のセクションとして検討しているんだと思います。

◉低級霊域、それは餓鬼の世界

ところでだ、実はわたしは修行を始めて、渋谷に道場――そのころは「鳳凰慶林館」という名前であったわけだけど、オウムの前身としてね――を持ち、そこから自宅に通っていたわけだけど、よく自宅に帰って休むとその低位霊界に猫がたくさんいるわけだね。これは一匹、二匹ではなくて五匹とか十匹とか。

で、どうもヤソーダラー（尊師の高弟、妻でもある）が機嫌の悪いときはその猫がわたしの体のとこにさーっと来て、そしてわたしの体をかむんです。ま、そういうわたしは恐怖を、毎回、毎回味わったことがあるわけだけど、で、これもまさに、同じように低級霊域という言葉を使うならば、まあ、餓鬼の世界の一種であったんだと考えて間違いないと思う。

つまり、ここで餓鬼と定義したのは、今までのその狭いカテゴリーの餓鬼ではないということです。要するに霊的存在で下位のものすべてイコール餓鬼である

と定義をここで入れ替えたいと思います。

◉すべてを包含した最高の教え

わたしが君たちにあまり霊的な話をしないのは、実はわたしはたくさんいろいろな体験をしてるわけだけども、それを経典によって裏づけない限り、正しく君たちにそれを伝えることができないと考えているからなんだね。なぜ正しく伝えることができないかというと、結局すべてを知っている魂、それは完全なる真理勝者しか存在しないと。そして、例えばいろいろなサマディによって、あるいはいろいろな神通によって、いろいろな神変によって体験することというのは、すべてその世界に内在すると。

ま、実はその『月刊宝石』の中で佐伯さんともう一人のその東北学院大学の教授が、オウムと幸福の科学を批判して、なぜものまねをするんだろうかと、新し

いものをつくればいいじゃないかと、密教というものは、新しいものをつくるというところから始まるんだというバカなことを言っている。

なぜこれがバカなことかわかるよね、君たちは。つまり、もともと世界のすべてを包含した教え、それがサキャ神賢の教えであったと。そしてシヴァ大神の流れの教えであると。そうでしょ。だとするなら、それ以上に新しいものをどうやってつくるんだという、わたしは疑問があるわけだね、それについては。

つまり、完璧な乗り物がここに存在しているのに、わざわざその完璧でない乗り物、これをつくってもしょうがないじゃないかと。そして、その絶対的な世界観を、絶対の世界観を信じること、これがわたしは帰依だと思います。

◉最後の神通力——漏尽通

ところでなぜこの話を始めたかというと、実は六神通の最後に漏尽証解智、つ

まり漏を尽くすことを徹底的に知る智慧というものが存在しています。

この漏尽証解智は、一般的には、苦しみ、苦しみの生起、苦しみの滅尽、苦しみの滅尽に至る方法という四つの絶対的真理を知る力であるといわれています。しかし、これはあまりにも抽象的概念であると。実際は、それはどういうことを表わしているのかというと、例えばこれこれに存在すること、それは苦しみであると。

例えば、例を挙げるならば、まず非神秘力ありて経験の構成ありと。つまり、神秘力がもしそこにあれば、そこに絶対的な光が存在すれば、自分自身の経験というものに対してサットヴァの光を当て、そしてそれによって、この経験は正しい、この経験は正しくない、この経験は苦しみに導く、この経験は苦しみから解放するといったような正しい見解を持つことができるわけです。そうだね。

しかしそれが、例えば非神秘力あるがゆえに、つまりこの世しか存在しない、今の自分の煩悩しか存在しないというようなまさに無智、まさに無明あるがゆえ

に、その経験の構成、例えば、性欲というもともと根本的なものがあればそれに振り回されてしまうと。例えば、食欲という根本的なものがあればそれに振り回されてしまうと。例えば、プライドという根本的なものがあればそれに振り回されてしまうと。例えば、権力という根本的なものがあればそれに振り回されてしまうと。例えば、現世の願望というたわいないものに心が集中すればそれに振り回されてしまうと。

◉経験の構成から識別へ

こういう経験の構成、これによって次に識別が生じると。わたしはこれをなそうと。あるいは、わたしはこれはなしたくないと。あるいは、わたしはこれを白だと考えると。いやわたしはこれを黒だと考えると。いやわたしはこれを肯定したいと。いやわたしはこれを否定したいと。いやわたしの幸福観はこうであると、

ね。このような識別の作用が生じます。

例えば例を挙げるならば、現世でおいしいものを食べる。現世で女と寝る。あるいは現世で名誉を得る。現世で権力を得る。あるいは、現世で社会的に自分の願望どおり生きると。これをよしと考える。これはまさに、その瞬間をとらえるならば、経験の構成が引き起こした迷妄の始まりであるといえる。

では、なぜそれを迷妄の始まりであるといえるのだろうかと。例えば、ここにガンの患者がいたとしましょう。このガンの患者は食事をしたくても食べられない状態が来たと。どうですか、君たち。今まで味覚にとらわれている人であったら、その人はどうなりますか。そのガンのカルマによって食べられないということは、苦しみだろうか、それとも喜びだろうか、幸福だろうか、不幸だろうかと考えたらどうだ。当然、苦しみである、不幸であると。

ところが、例えばここにだよ、その非神秘力ではなく神秘力があって、その人がしっかりと、自分自身は未来においてガンにかかると。よって、今のうちに味

覚を捨断しておくことは、自分の苦しみを前もって取り除くことであると考えるならばどうだ、それは。その人がガンにかかったとしても、食べられないとしても、そこに苦しみは存在するだろうか、しないだろうかと。そこに存在しないよね。

例えばここに、美しい男性でも女性でもいいからいたと。その美しい男性や女性に対して性的な欲求が生じたと。そして、相手も煩悩が多いがゆえにそれに応じたと。そして交わったと。そして交わったがゆえに対象に対してとらわれたと。そして、その対象なしでは生きていけなくなってしまったと。「わたしもう生きていけないの」って。ね。「いや、俺はもうお前なしでは生きていけないんだ」と。なかなか、これはよくテレビドラマで聞く内容だけども。

しかしだよ、この異性の関係というものは、どうだ君たち、死というものを境に切れてしまうかしまわないか。

◉死ぬときの苦しみは……

今マイトレーヤは、十一月の十二日からのアンダーグランド・サマディのために修行を続けている。そして彼は、二日前だったかな、わたしに素晴らしい言葉を吐いたんでここに紹介したい。

彼は今、第一静慮、第二静慮とどんどんステージが上がっていっているわけだが、その段階ですごくその寂しさが出てくると言っている。寂しさが出てくるというのは、現象から離脱するときの寂しさだね。

で、それはまだ愛著が切れてないからだよとわたしが話をしたら、彼は「いや、あの尊師、死ぬときはこういう気持ちなんでしょうね」と。まさにそれはそのとおりである。「サマディそのものは死であるから、当然、死ぬときはこういう気持ちなんでしょうね」という彼の言っている言葉、これは大変深い意味がある。つまり死というもの、これを前もって経験すると。

で、なぜわたしが今そういう話をしたかというと、この性的な愛着の対象と別れるときの苦しみは、それはそれを経験していない人の死に対する苦しみの何倍、何十倍となく強いということなのである。

ところがだ、現代はサキャ神賢もおっしゃっているとおり法則が非法則として存在している世の中である。法則が非法則として存在しているということはどういうことかと。これはまさに、例えばそういうその死の瞬間の別れを美化してしまうと。

しかし、実際これを美化してしまったらどうなるかというと、生存している人は生存している人で苦しみが残り、死んだ人は死んだ人でその対象を追いかけるがあまり、逆に無智にとらわれたり、愛著にとらわれたり、あるいは貪りにとらわれたりという形で輪廻転生を失敗してしまうと。つまりこれは、先程述べた法則が非法則として認められ、非法則が法則として認められる実例の一つである。

例えばオウム真理教のように、真理の教えを展開していて、それを社会が叩く

と。これはまさに、法則が非法則として認知されている典型的な例であると。そうだね。

そして、智慧ある者はこれらの話を聞いてピンと来るだろう。ところが智慧のない者はこれらの話をいくら聞いてもピンと来ないと。

それはなぜならば、ちょうどここに糞尿のおけがあると。その糞尿のおけに蓋がされていると。そして、その蓋がされてる上に目隠しされた人が歩いて、ちょうどそこへ足を突っ込むようなもんであると。

つまり、もしサットヴァであるならば、その目隠しを外し、そして一つ一つ確認しながら安全に歩けば、糞尿の入っているおけに足を突っ込むことはないと。しかし、それをしないで生きる習性をつけてしまった無明の凡夫は、非神秘力にとらわれている凡夫は、そのようにして苦しまなければならないのである。まあ、これは実際のところ、わたしが見る限りにおいては凡夫だけじゃないけどね。サマナ（出家修行者）の中にもたくさんいるけど。

◉落下——苦しみの世界へ

でだ、この経験の構成から識別、識別からいよいよ具体的経験へと入ってくる。これはちょうど、逆のプロセスにおいても同じことがいえます。例えば、ある人が精神集中を続けると、まず形状界に現象が現われます。つまり、夢の世界その他で、それと同じような経験をするようになります。なぜかというと、この形状界と粗雑次元の違いは、形状界は二つの要素で済むからです。二つの要素で済むとは何かというと、そのイメージによる形成された身体、ヴァイブレーションによって形成された身体と心の構成要素、この二つしか存在しないと。

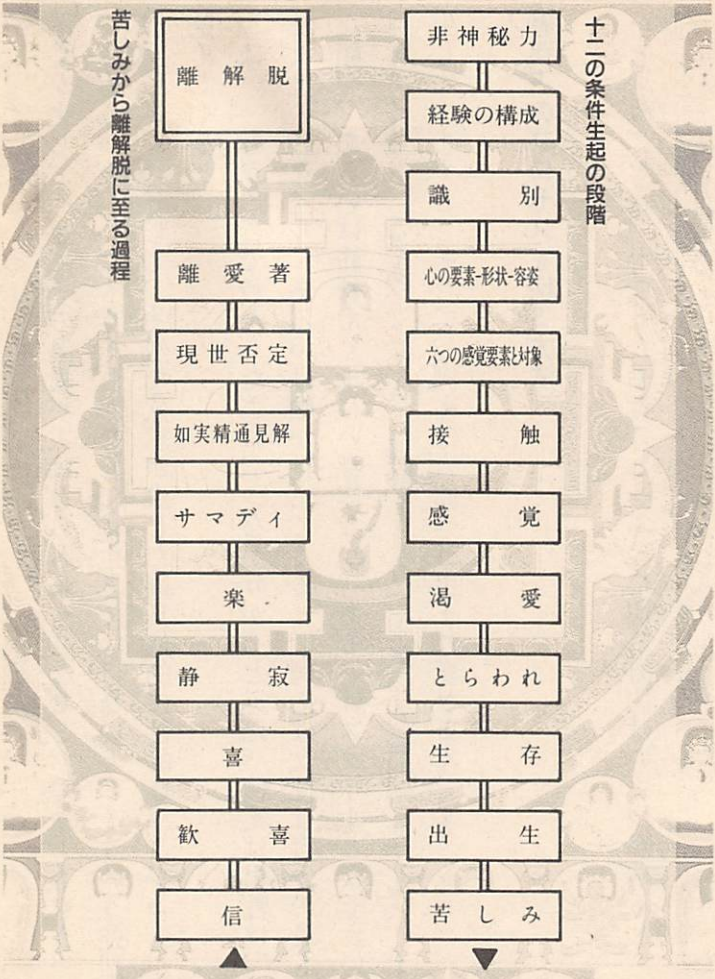
つまり、今上から落下のプロセスだからね。識別からいよいよ、形状-容姿と心の構成要素という二つの要素がそこに生じ、そして形状界での経験が始まると。もちろんこの形状界の経験は、いいかな、上位形状界であれば救われますが、下位形状界、つまり下位アストラルであるならば救われないと。

なぜならば下位アストラルには、より具体的な煩悩的要素が集積しているからです。たっくさん積み上げられているわけだね。その下位アストラルのデータによって、また逆に、その下位アストラルに転生している多くの魂がいます。それは上位アストラルの何万倍、何十万倍、何億倍という多くの魂がいます。

で、その魂の形状や、あるいはスタイルや、あるいはそこに存在する食べ物や、いろいろな低位の煩悩と接触が生じます。そして接触が生じるがゆえに、感覚が生じると。感覚が生じるがゆえに、もう一回それを経験してみたいなと思うようになると、ね。

これは例えば、特に男性、あるいは女性でもそうだけども、イメージ人間はよく夢の世界で恋愛をしたりとか、あるいは夢の世界で何か食べ物を食べたりとかしてるはずだ。それがまさに、この形状-容姿と心の働きから感覚に至るプロセスであると。いいですか。

そして、形状-容姿と心の働きが感覚に至った者はどうなるかと、次の段階で


十二の条件生起の段階
非神秘力
経験の構成
識別
心の要素-形状-容姿
六つの感覚要素と対象
接触
感覚
渇愛
とらわれ
生存
出生
苦しみ
苦しみから離解脱に至る過程
離解脱
離愛著
現世否定
如実精通見解
サマディ
楽
静寂
喜
歓喜
信

十二の条件生起の段階

渇愛が生じ、そしてその渇愛が次はとらわれへとなると。愛執——もう一度もう一度もう一度、いやもうそれがなしでは生きていけないと。そういう強烈な欲求が生じます。そして、強烈な欲求が生じた後具体的に性的なヴィジョンが例えば見えてくると。

はい。もうここでわかったよね、つながりが。どうだ。例えば男性は、最も好む女性のスタイル、あるいは顔が見えてくると。例えば女性は自分の最も大好きな顔や、あるいは筋骨たくましい身体とか、あるいはスタイルとかそういうのが見えてくると。「さあ、この人と経験しよう」と思った瞬間、どうだ、子宮へ転生していますと。そして、例えば人間へと生まれ変わるんです。

◉落下のプロセスを切る方法

ということは、わたしたちはこれをぶった切る方法はいくつかあると。まず第

一に、非神秘力を完全に神秘力に変えてしまえばこの現象はすべて起きないと。どうだ。これは最も賢いやり方であると。

次は経験の構成を、瞑想によって一つずつ捨断したらどうだろうかと。これも生じないと。どうだ。

次は識別に対して、ね、その識別を瞑想によって捨断したらどうだろうと。どうだこれは。これも止まるよね。どうかな。

あるいは、イメージの身体と心によって構成されているこの形状界での経験、この形状界での経験を現象と同じだというふうに考え、そして形状界の身体を捨断する瞑想とか、あるいは心の構成要素を捨断する瞑想を行なったらどうだろうか。どうですか。

では、次はその外界と接触する六つのね、感覚器官、この六つの感覚器官を捨断したらどうだろうかと。どうかな。

あるいは、完全に接触を断ってしまったらどうだろうかと。どうだ。あるいは、

感覚が生起しないようにしたらどうだろうと。どうだ。あるいは、一回一回、渇愛が生じた場合、その渇愛を、一回一回生じた段階で、それを捨断する瞑想を行なったらどうだろうかと。どうだ。わかるよね。

もうこれ以上行ったら駄目だよ。つまり、その次のとらわれてしまったら終わりと。だから、もしそのとらわれを利用するんだったら、より高いものにとらわれるように努めると。つまり、この人間界でない、形状界の神にとらわれるだとか、あるいは非形状界の神にとらわれるだとか、ね、それを行なったらよろしいと。

そしてこれらはすべて、そういう真理の流れを完璧に知る力を得る状態、これが漏尽証解智なんですよと。そして、これらの一つ一つの捨断のための瞑想が、例えばテーラヴァーダであり、あるいはタントラ・ヴァジラヤーナであり、あるいはマハーヤーナであり、あるいはヒナヤーナなんですよと、ね。わかりますか。

◉瞬時に〝マハー・ムドラー〟の悟りへ到達

よって、例えば心の構成要素を分解するために無色（むしき）の瞑想が存在していると。ね。無色の瞑想、非形状界の瞑想とは何かと。そこには形がないでしょうって。どうだ。形がないから、思索のみによっていけるはずじゃないかと。どうかな。心のその浮いてくるデータ、その構成要素さえ分解してしまえば、形状界は壊れてしまうでしょって。どうだ。つまり、形状界の要素というのは形状と心の働きであるから、心の働きがなくなったら形状界は消えちゃうでしょ。どうだ。そして、この深遠な教えがマハー・ムドラーであると。

そして、このマハー・ムドラーに到達するためには、しっかりと教義を理解しておく必要があると。例えばだよ、今君たちが行なっている教学システムのこの百三十本のテープを君たちが完全に記憶したとしましょう。この状態で君たちがマハー・ムドラーに入ればだ、集中力さえその修行中に身につけていれば、三日

かからないうちにマハー・ムドラー成就するでしょう。それほどの教えが、今君たちが行なっている教学システムの中にはあるんだよ。

つまり、わたしはまずラージャ・ヨーガのテストをして失敗した。クンダリニー・ヨーガのテストをして失敗した。よって、マハー・ムドラーを次は中心に据えるためにはどのようにしたらいいか考えた。そして、そのためには教えであると。で、まず経典の記憶修習(きおくしゅじゅう)をやらせてみたと。どうも経典は難しすぎて理解できないと。で、次に説法テープと。確かにこれはかなり理解していると。

しかし、例えば、まだその内容について正確に話すことのできる人が少ないと。でも、もし君たちがこの経典の内容、あるいは説法の内容を完璧に理解することができたら、瞬時にマハー・ムドラーの悟りへと到達するであろう。

では、それはなぜであろうかと。それは今なしている教学体系、これはまさに無色瞑想の奥儀であるからであると。つまり、まず教義を完全に理解すると。そしてその理解することによって徐々に徐々に身(しん)・口(く)・意(い)の統御に入っていくと。

しかし、君たちのレベルではまだ自分自身が正確に見えていないから、当然心のわだかまり、あるいは屈折、あるいは心の闇、あるいは色のついた目等々のいろいろな対象に対する認識の甘さなるがゆえに対象を正確にとらえることはできないだろう。

しかし、少なくともその教えを実践し、努力しているうちに、その君たちの貪・瞋・癡という三つの下位につながる絆は弱まり、あるいはプライド、卑屈さ、あるいは平等であると思う心、こういう働きが徐々に弱まり、そして言葉においては善行をなすがゆえに清められ、ね、アストラルが清められ、そして行為においては慈愛のこもった行為をするがゆえに行為が清められ、そして心においては教学により考えるがゆえに清められ、徐々に徐々に柔軟な身・口・意が形成されてくるはずである。

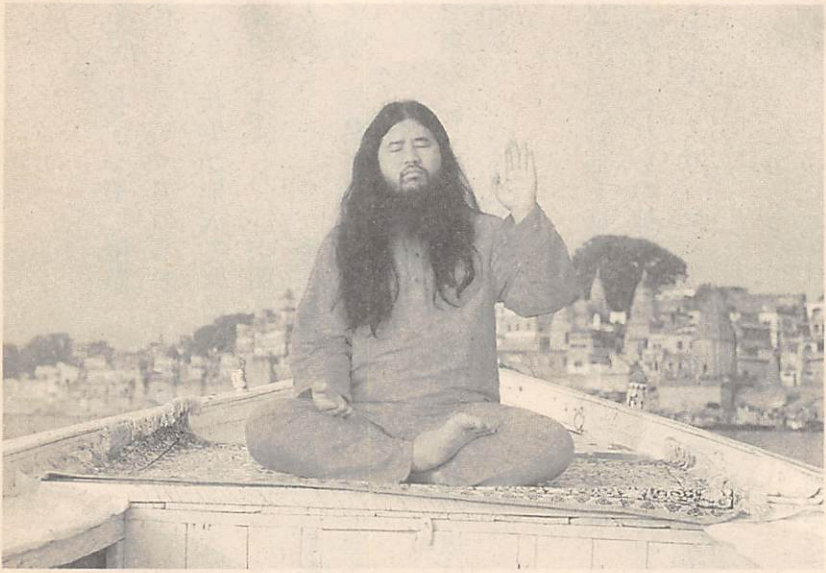
そしてこの後、そのマハー・ムドラーの達成、解脱の達成をひたすら思念することにより、君たちの心は徐々に徐々にグルと合一すると。そして、グルの説く

法の真の意味合いが理解できるようになってくると、ね。

◉神秘の六神通の世界へ

それはちょうど、基本的なコンピュータのプログラムを学んだ者が、コンピュータの大家に、コンピュータの奥儀を学ぶのと似ている。あるいは、鍛冶屋の丁稚が、一生懸命その基本的な火の吹き方、あるいは鉄の伸ばし方等の基本的なものを学んだ後、その素晴らしい鋼を作るにはどうしたらいいかという講義を受け、それをマスターする、そういう状態と似ていると。

つまり、基本的な現象については、自分自身で教えをしっかりと記憶し、それを記憶修習し、実践することによって捨断すると。そして、実際最終的な悟りへ到達するときは、自分の最も引っかかっている部分の教えを聴き、今まで学んだ法と照らし合わせながら、そして、自分の心をしっかりと見つめ、集中し、それ



を捨断していくならば、必ずや第二静慮へとまず入るであろう。

この第二静慮は君たちも知ってのとおり、無熟考無吟味であると。つまり、一切の思念がわいてこない状態が形成される。そして、その次の段階で、心身が完全にエネルギーによって充実し、心が明るくなった段階で、その明るささえ捨断し、第三静慮へと入ると。そして、第三静慮からいよいよ最終段階、つまり感覚が完全に静止した状態、苦楽が完全に静止した状態、心は全き平安を得た状態である第四静慮へと入っていくのであると。

そして、ここまで来るとしめたもの、後は勝手に化身が抜け出し、そして内なる体験がどんどん始まり、六神通の世界へと入っていくと。これがマハー・ムドラーの実態である。

そして、この神秘的な六神通を経験するプロセスの他に、もちろんサマディのプロセスが存在すると。これらの神通のプロセス、あるいはサマディのプロセス、これを修習し続けることにより、マハー・ムドラーは徐々に成就から完成へと向

かっていくわけである。

◉人を超え、神を超え、解脱していくために

ということは、君たちが今行なっている教学というものは、説法士になるための、比丘説法士になるための手段ではなく、本当の意味での君たちが向煩悩滅尽多学男やあるいは向煩悩滅尽多学女となり、人を超え、神を超え、そして解脱していくための道であるということを認識していなければならないはずである。

ところがだよ、君たちを見ているとわたしはそのように見えないんだね。グルに言われたからやっている、これをやらないと教団にいづらいからやっている、そういう印象が強いんだね。

よってそこでだ、まず考えなければならないのは、なぜ自分自身は出家したのかと。例えば、Kのように悩んで魔境に入り、その魔境から抜け出せないのもい

る。しかし、それはもし教義が理解できてれば、本来は悩まないはずなんだ。理由はわかるよね。

修行することによってどこに入っていくのかと。どうだ、それは。表層意識を泳ぎ回るのか、それとも深く深く入って潜在意識に入っていくのかと。どうだ。ではだ、潜在意識に入っていく、その潜在意識というのは、この人間界へ生まれたぐらいだから、浄化されているのか、それともされていないのかと。

では、浄化されていない状態にどんどん深く入っていったとして、そこであわたしは煩悩があったんだとか、ああわたしは苦しいんだと考えたとして、それは意味をなすだろうか。どうだ。

実は、同じことを今Uが経験している。Uは、白血病に似て——ま、実際白血病とは違い、リンパのガンであると。そして、このガンが発生した理由というのは、まあいろいろ考えられるが、カルマ的な考え方からいうならば、彼女が成就した結果であると。それはなぜ成就した結果なのかというと、今生において形成

した潜在意識が、結局肉体に現われたんだと。いいですか。それはちょうど、わたしの今の失明とも似ていると。

しかしだ、ここでこう考えなければならない。来世苦しむはずの経験を今しているのであると。どうかな。そして、この現象はすべて自分自身が今生においてなしたカルマの果報であると。どうかな。そして、このカルマの果報を逃れたとしても、それは来世必ず返済しなければならないカルマなのだと。どうかな。

だとするなら、今ここで苦しいとか、つらいとか、逃げたいとかいろいろ考えたってしょうがないじゃないかと。どうかな。つまり、なすべきことを淡々とす以外ないんだと。淡々と立ち向かうしかないんだと。どうかな。

このように考えられたら、その人は病気にかからない。ところが、このように考えられないから病気にかかるんだよね。わかるね、言っていることは。つまりこのように考えたら、淡々と自己のカルマは消滅していきます。そして、一日二日三日と、どんどんどんどん気力は充実していくはずである。ところが、このよ

うに考えられないと。

じゃ、なぜ考えられないのかと。それは先程も述べた、今生培ったもの、これが成就によってどんどん現象化してきているんだと。ね。それは、心の働きとしてこの肉体が形成されてるわけだから当然のことであると。それは、そう見ることができるかどうかだね、すべてを。

で、すべてをそう見ることができたら、決して言葉による弱気を吐いたりしないと。なぜならば、弱気を吐くことは次のまた新しい弱気を生む原因となると。これは、例えばNの揺れも同じだね。それから、夜になるとたむろしている、まあ、今教学システムに入っている人たちがいるみたいだけど、この人たちも同じだね、これは。

つまり、結局真理のデータを一生懸命入れても、そのような形でデータの量に、あるいは喜貪（きとん）して入れるデータと、それからつらいと思って入れるデータの差が出てくると。喜貪して入れるデータは、つまりこのデータを欲しいと、ああ、こ

れは楽しいなと思って入れるデータは、時間が短くともそれが多ければ、心は当然そちらの方向に逃げていってしまうと。

例えばそれはね、Kとか、あるいはいつも名前の出てくるAとか、ね、この人たちのやはり心の逃げというのはそれを捨断しようと思わない限り、決して捨断できないだろう。

◉最高のマハー・ムドラーの奥儀

わたしが、今日君たちにこういう話をしなければいけないと考えたのは、先程述べたとおり、早く漏尽証解智、つまり漏を完全に尽くす、漏を破壊する、その詳しい理解、その世界へ到達しなさいよと。その世界へ到達することこそ、君たちが本当の意味で苦しみを生まない条件をつくったということになるんだよと。

なぜ条件をつくったということになるかというと、いくらこれは苦しみである

と、これは苦しみの生起であると、これは苦しみの滅尽であると、これは苦しみの滅尽に至る方法であるということが理解できたとしてもだよ、それを実際に自分自身の身・口・意の行動原理に当てはめ、行動原理として使わなければ意味をなさないということなんだ。

これは、君たちが今行なっている教学も同じである。いくら教学をしたとしても、それは別世界の話であって自分たちと関係がないと、ね。例えば、先程言った奉仕者になる寸前の人たちがいるわけだけど、その奉仕者になる寸前の人たちを見てだよ、その人たちに対して声もかけないと。「君たち」と、「君たちは真理の実践をしなさい」と。

そういう一言も言えない先輩の成就者や弟子たちがいくらいたとしても、救済は成功しないし、またその人たちが大乗の道へ足を踏み入れることもできないだろう。わたしの言いたいことはわかるよね、どうだ。しかし、それがオウム真理教の実態であると。

もう一度言うよ。わたしはこの教学システムというのは、君たちを瞬時に、ラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガをふっ飛ばしてマハー・ムドラーの成就へ至らせるための一つの方法として考えている。それは、例えばサキャ神賢の弟子、マハーモッガラーナが一週間で悟ったように、基礎さえしっかりできていれば達成できないことではない。わかるね。なぜならば、いきなり形状界に存在する心の働きを止滅してしまうわけだから。わかるよね。

ということは、それは、識別を止滅することになり、そしてそれは、イコール経験の構成を止滅することになる。経験の構成を止滅するがゆえに無熟考にして無吟味となると。そして、その経験の構成が完全に止滅した段階で非神秘力から神秘力へ到達する。光へと没入すると。そこは空そのものであると。心の本質そのものであると。これがマハー・ムドラーの奥儀であり、最高の奥儀です。

はい、では質問を受けましょう。

【質疑応答】

（質問者A）四つの静慮と四つの無量心と対応するという説法があったんですが、これはどういうことでしょうか。

（尊師）四つの無量心と対応するというのは、そういうその静慮に到達するためには、心を形成していかないといけないということです。

例えば称賛というのは心を明るくします。わかるかな。例えば、悲しみ、他人の悲しみをしょうということによって、結局この人生がすべて苦であるということを認識します。わかるかな。

例えば、慈愛の瞑想をすると心に喜びが満ち、身体は喜びの身体へと変わります。わかるかな。例えば無頓着というのは要するに苦、楽関係なく頓着しない心を修習するわけです。わかるかな。それによってサマディに入ることによって、そういうものが具体的に内側に根付くんです。わかるかな。そういう意味で四無

量心と四つの静慮が対比しているんです。

（質問者A）わかりました。ありがとうございました。

（質問者B）基本的な質問なんですけれども、形状-容姿の形状というのは……。

（尊師）スタイル。

（質問者B）スタイルですか。

実は、今四念処の瞑想をしていて、「我が身これ不浄なり」をやっているんです。そこで、垢とか汗が出るから身体は汚いなということはわかるんですけど、どうしてもその形というものにこだわってしまうんですが……。

（尊師）だとしたら、「我が身これ不浄なり」をやってはいけない。まずやらなければならないのは、身体の中心は何だろうかと。それは骸骨であると。じゃあ、その骸骨に何がくっついているんだと。それは、例えば腱がくっついて筋肉がくっついていると、ね。じゃあ、おなかには何があるんだと。それは腹膜とか、例え

ば内臓があるんだと。一つずつそれを観想する。肝臓があって、膵臓があって、脾臓があって、腎臓があって、胃があって、十二指腸があって云々と。で、例えば肺があってと。で、まあ、もちろん心臓があるから、そこから血管が出てて、で、筋肉を貫いていると、例えばね。で、真皮があって、表皮があってという形の観想すると。

（質問者B） それをやっていると、確かに汚いなと思うんですけども、それじゃあ、その肉体を形づくっているのは何なのかということをどうしても考えてしまうんです。それが形状なのかなと今思ったんですけども……。

（尊師） 形状というのは外側であるよね。例えば、一生懸命お風呂に入って石鹸つけて洗えば綺麗じゃないって。しかし、それは綺麗になったのはあくまでも皮膚の表面だけでしょ。

（質問者B） はい。

（尊師） わかるよね。

（質問者B）この形状というのは、外枠ということですか。

（尊師）ここでいう形状は外枠です。しかし、「我が身これ不浄なり」の観想をするときは、実際「我が身これ不浄なり」といきなり観想するんではなくて、我が身を正観すると。正しく観察すると。正しく観察することによって、自分たちが思っているほど、対象に対してとらわれる要素というのは少ないんだなということがわかってきます。徐々に徐々に、それが本質的にはそういう構成しか存在しないんだということがわかってきます。

（質問者B）じゃあ、結局、「我が身これ不浄なり」だけでは対象を捨断することができないということですか。

（尊師）そうです。「我が身これ不浄なり」という思い込みでは対象を捨断することはできません。「我が身これ不浄なり」じゃなくて、身体を正確に観察すれば離れることができます。

（質問者B）ありがとうございました。

（質問者C）経験の滅尽についてなんですけど、経験の止滅というのは止めて滅するということでしょうか。

（尊師）そうだね。

（質問者C）ということは、この経験というのはマハー・ニルヴァーナに入っても出てくるものなんでしょうか。

（尊師）マハー・ニルヴァーナに入っている間は出てこないよね。それがグナと干渉されて動きが生じたときに出てくるんだよ。

（質問者C）ということは、個人の経験というのは、残っているということに……。

（尊師）経験そのものは残ります。

（質問者C）わかりました。

（尊師）だからね、過去世がずっと思い出せるわけだよ。もし経験が残らなかったら、過去世は思い出せないよね。

（質問者C）はい。マハー・ニルヴァーナから落下したときに経験が出てくると

いうことですか。

（尊師）そうです。

（質問者C）ということは、三グナに干渉されたときには落下してしまうのですか。

（尊師）三グナに干渉されても、もしそれに対して全く影響を受けなければ落ちないよね。

（質問者C）全く影響を受けるか受けないかは、経験によるものではないんでしょうか。

（尊師）例えばね、経験にもいろんな経験があるよね。光に対する経験とか。例えば、T君の日々の生活を考えてごらん。例えば、あるときはプライドというものが出てくるかもしれないと。あるときは食欲が出てくるかもしれない。つまり、その両方が存在することもあるし、一つずつ存在することもあるし、あるいはその全く存在しないこともあるよね。わかるよね。

で、三グナというのは一番初めの真我に対する干渉だから、これは明らかに光だと考えてください。だから、そこで要求されるのは光に対する経験の度合ということになります。

（質問者C）ということは、光に対する経験は残っているということなんでしょうか。

（尊師）というよりも、真我そのものが光なんだよ。ま、光という表現は合わないかもしれないけど。

もう一つそれから言っておきたいことは、真我独存位に入った場合、欲界、色界、無色界、つまり愛欲界、形状界、非形状界、このどこへも転生できるということでしょ、結局は。絶対自由というのは。

（質問者C）ええ、マハー・ニルヴァーナ以上は。

（尊師）でしょ。転生できるということは、それらの要素、つまり記憶を自在に再現することができるわけだよね。でも、記憶が再現されたからといって、そこ

で落ちるかどうかというのは別問題でしょ、例えば。つまり、経験を止めておくことができるというのは、動かすこともできるわけでしょ。わかるよね。しかし、それは真我そのものの経験ではないわけ。真我そのものが所有しているわけじゃないわけ。まだそれは離れたところに存在しているんです、言い方を換えれば。

しかし、もう無明から経験の構成へ入っちゃうと、これはもう自分と経験の構成とが一緒という感じになっちゃうわけだ。分離されていないわけ。離解脱がもう切れてしまった状態だから。わかるよね。ということだ。

（質問者C）マハー・ニルヴァーナではなくて、ニルヴァーナの場合は絶対自由ではないわけですよね。

（尊師）自由・幸福・歓喜はあると考えていいよ。ただ、低位のニルヴァーナというか、低位形状界をぶち抜いたニルヴァーナはそういうことはないけどね。でも、少なくても静止はしているよね。

（質問者C）マハー・ニルヴァーナとマハー・ボーディ・ニルヴァーナの違いと

いうのがまだよくわからなんですが。

（尊師）じゃあ、こういう説明をしようか。一生涯火を使わなかった人がいるとしようと。その人が死んだと。ある人は、焚火の火だけを経験して死んだと、ね。ある人は、そうだね、火のすべてを経験したと。つまり、火からプラズマが生じる、プラズマから核融合が生じると。こういうプロセスすべてを経験したとしましょう。

このA、B、Cにおいて、BとCは火を経験したと表現することができる。どうだ。Aは火を経験したとは表現できない。どうかな、これは。これが、ニルヴァーナとマハー・ニルヴァーナの分離です。

では次に、この火というそのパートを考えた場合、焚火の火しか経験しなかった人と、それから核融合を含めて最終的な光の発生まで経験した人がいたとしましょう。その光の発生が最後だとするよ、例えば。

この場合、後者つまりCはすべてを経験しているわけだから、これ以上の経験

は存在しないと。その状態で完全煩悩破壊しているわけだから、巻き込まれることはないと。これは、マハー・ボーディ・ニルヴァーナです。

（質問者C）そこですべてということはあるのだろうかと思うんですけど。

（尊師）それは、だって三界の構成に限界がある以上、すべては存在します。すべてという言葉は。

（質問者C）『イニシエーション』（オウム出版・麻原彰晃著）の悟りのプロセスで、「バナナを経験し、オレンジを経験し」というのがありましたけど、それと同じでしょうか。

（尊師）「バナナを経験し、オレンジを経験する」ということと今の比喩の違いは、「バナナを経験し、オレンジを経験する」というのは並列的経験だよね。しかし、今の経験は累加的経験だよね。

（質問者C）わかりました。

（尊師）わかるよね。

（質問者C）あと最後に、真我の特性に絶対歓喜というのがあるということなんですけど、静慮で経験する楽とは違うものなんでしょうか。

（尊師）楽という状態と、また歓喜は別なんです。真我の本質の歓喜というのは別なんだよ。そう考えてください。

（質問者C）はい、わかりました。どうもありがとうございました。

（質問者D）わたしは信徒のとき、個の完成がニルヴァーナで、すべての魂を救済すればマハー・ニルヴァーナに入れると思っていたんですが、結局すべての経験をし尽くせば、完全になるんでしょうか。

（尊師）いや、だから、例えばすべての魂を救済すると。これはマハー・ニルヴァーナでOKだよ。つまり何を言いたいかというと、先程も説明したけども——しっかり聞いてね——ニルヴァーナとマハー・ニルヴァーナの二つに分類する方法と、ニルヴァーナ、マハー・ニルヴァーナ、マハー・ボーディ・ニルヴァーナの三分

割法と両方あると説明しているよね。そして、その二分割法のマハー・ニルヴァーナを、三分割法ではマハー・ニルヴァーナとマハー・ボーディ・ニルヴァーナという分類をしたんだと言っているよね。

で、例えばすべての魂を救済するイコール、マハー・ニルヴァーナという場合、そのすべての魂の救済は、その救済者に多大なる功徳の還元として当然返ってくるから、その人はこれ以上にない経験を続けます。

例えばだよ、マスコミのよしあしというのは、日本でわたしほど知っている者はいないんじゃないか。どうだ。この何年間の中で、おそらく登場回数はわたしが一番多いんじゃないかと思うんだけど、ね。例えば、公称二百万という幸福の科学も、わずか二カ月、テレビに登場したのは二カ月ぐらいだよね。わたしは二年間ずっと悪役として登場したから。でしょ。で、まだ今もポツポツと、まあ、善玉だったり悪玉だったりして登場しているけど。

で、何を言いたいかというと、例えばそういう多くの経験ができるというのは

徳があるからだよね。つまり、結局救済者というのは偉大な経験ができるんですよ。

（質問者D）じゃあ、マハー・ボーディ・ニルヴァーナに入ろうと思えば……。

（尊師）結局、「自己の苦しみを喜びとし、他の苦しみを自己の苦しみとする」という実践をひたすら続けるしかないよね。

（質問者D）すべての魂を救済した方が、早くすべての経験ができるということでしょうか。

（尊師）はい、そうです。

（質問者D）ありがとうございました。

（質問者E）今日の説法で、ラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガじゃなくって、いきなりマハー・ムドラーの成就ができるというお話があったんですけども、以前ですと、ラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガを踏まえた上で、マハー・

ムドラーの成就があるとされていたんですが。

（尊師） 質問していいかな、N。例えば、Nみたいにラージャ・ヨーガを成就したと。そして一生懸命功徳を積んでいると。これと、例えば前生のカルマによってクンダリニー・ヨーガの成就をしたと。しかしあんまり功徳を積まないと。この二人が〝よーいどん〟で修行して、じゃあ次、マハー・ムドラーをどちらが早く成就するんだと。どちらが早く成就するんだ、これは。

（質問者E） 功徳を積んだ方だとは思いますけども。

（尊師） 例えば、今のAV班（オーディオ・ビデオ班）がいて、ほとんど教学もできない状態で、睡眠時間もものすごく短くて頑張っていると、ね。で、グルの意思として作れと言われたことを一生懸命やっていると。この人たちと、例えば経行（きんひん）修行に入っていながら、経行もろくすっぽやらないで、一応例えばだらだらだらと半年一年と修行して成就したと、ね。本当は一週間、十日で成就するべきものが一年かかったと。この人たちとよーいどんでマハー・ムドラーの修行

をさせて、どちらが早く成就するんだ。うん？

（質問者E）頑張っている方だと思います。

（尊師）わかるよね。つまり何かというと、集中力・思索力というのが当然マハー・ムドラーに要求されるわけでしょ。で、集中力はワーク（奉仕活動）によって培い、思索力を例えば教学によって完璧に得た場合、その人が思索に集中したとしたら、当然先程言った心の構成要素は分解されるよね。どうだ、それは。

（質問者E）ええ、そうだと思います。

（尊師）だよね。しかも、その人は救済活動のためのワークという大乗の道を一生懸命歩いているわけだよね、一生懸命煩悩と闘いながら。どうかな。ということは、今一、二、三のステップでいっていたものが、一からいきなり三に飛んだりとか、あるいは、ゼロから三に飛んだっておかしくはないでしょ。

（質問者E）まあ、おかしくはないと思うんですけども、ただラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガに特有の経験があった方が、幅はあるんじゃないでしょう

か。

（尊師） まあ、わたしの自分の修行の経験からいけば――というよりも、幅そのものは、確かに、ラージャ・ヨーガとはこういうものであると、クンダリニー・ヨーガとはこういうものであると、マハー・ムドラーとはこういうものであるという説明はしやすいだろうね、それは。

しかしこのマハー・ムドラーというのは、もともとラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガの上に君臨するべきものだから、逆にそのマハー・ムドラーが完全に終ってしまえば、ラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガについての説明は十分できると思うけどね。

（質問者E） やっぱり、並列というよりも含んでいるというふうに考えてよろしいんですか。

（尊師） そうです。それは、当然そうだよね、それはね。

（質問者E） わかりました。ありがとうございました。

第二章　漏尽通、それはグルの条件

それでは、漏尽通（ろじんつう）はどのような形で救済に役立つのだろうか。その実例についてこれからお話をしたい。

もともと漏尽智は、すべての煩悩（ぼんのう）を知る力、その煩悩の生起、そして煩悩の滅尽、そして煩悩の滅尽に至る方法、これを完全に知ることである。

苦しみと煩悩というものの間には、大いなる隔たりがある。それは、煩悩を追求していく結果、苦しみが生じるのであり、その苦しみを滅尽するためには、煩悩の生起を知らなければならない。そして、煩悩の滅尽を知って初めて苦しみの滅尽がそこに生じる。つまり、煩悩の滅尽に至る道、イコール苦しみの滅尽に至る道ということになる。

もともとグルと弟子の関係というものには、親子以上の関係、あるいは恋人以上の関係、あるいは夫婦以上の関係が存在している。なぜ恋人以上の関係、親子以上の関係、夫婦以上の関係が存在しなければならないのかというと、それは弟子のグルに対しての絶対的信頼が存在していなければ、グルのなすカルマの現象

化、およびカルマの捨断（しゃだん）の方法について疑問を生じさせるからである。

〝煩悩を知る〟というこの漏尽通の特徴により、これから話すのは弟子が煩悩に苦しむ話が多いが、これは彼らが普通の人と比べて特に煩悩的であるからというわけではない。修行に入ると、煩悩が浮き彫りにされるのである。特に、集中的な瞑想修行に入ると、その傾向が強まる。彼らは、そこでその浮き彫りにされた煩悩を知り、そしてそれを止滅していくのである。

なお、ここに挙げたようなケースの他に、弟子の成就を判定するときにもこの漏尽通を使うことを付け加えておく。

その一　わたしはこのようにして弟子を導く

◉性欲に苦しんだA師の場合

Aという師がいた。このAという師（クンダリニー・ヨーガの成就者）は大変優秀な師で、よく説法を理解し、そして神通もかなりのものを有していた。しかし、Aという師には性に対するイメージがまだ残っていた。

もちろん、クンダリニー・ヨーガは完全なる性の捨断を目的としたヨーガではないから、性の昇華を目的としたヨーガであるから、残っていて当然である。しかし、問題はその性の昇華が完全になされないとき、その性エネルギーをどのような形で止滅するかなのである。

彼は大変若く、なかなかハンサムでもある。よって、女性の誘惑も多い。もちろん、神通をかなり使えるぐらいの師であるから、性エネルギーを漏らすということそのものが、どのように自分自身の神秘的な力に影響を与えるかをよく知っている。よって、彼はこう考えた。性エネルギーを漏らしさえしなければいいと。そして、イメージ力によってその煩悩を満足させようとしたのである。

ちょうど性欲の強い女性のサマナがいた。この性欲の強い女性サマナは、無対象、特定の対象ではなく、不特定の対象に対して性欲を有している、つまり本質的に性欲を持っていた。それにA師は完全に感応し、そして巻き込まれてしまった。しかし、さすがに成就者である。最後まで至ることはしなかった。つまり、性的交わりはなさなかったのである。

わたしは、その支部の出来事を遠く離れた富士山総本部道場で見ていた。そして、その問題をどのように解決するか考えた。そして、彼に四日間の断水断食の集中修行をやらせたのである。もちろん、彼はそれでいったん抜けた。

読者の皆さんは、びっくりするかもしれない。四日間の断水断食、これは常人ではないと。しかしオウム真理教の師のレベルになると、それぐらいのことは普通にできるのである。

しかし、彼の根本的煩悩というものはそこで完全に捨断されたわけではない。それは、一時的にそのエネルギーの引っかかりが、断水断食という形で取り除かれたにすぎない。

次にわたしのなした彼に対する課行は、経典の記憶修習であった。この経典の記憶修習により、彼のもともと小さいときから植えつけた、そのような性的イメージというものを捨断する方向に向かわせたのである。

そして彼は、今徐々に徐々にその性的イメージの捨断を行ない、かなりの部分捨断できるようになってきている。しかし、まだ本質的に捨断できているわけではない。

そこで、わたしは次に、彼に特別な集中を行なうことにより、エネルギーを上

昇させる方法を教え込んだ。まあ、これによって彼の性的煩悩はかなり減少したようである。

これらはすべて漏尽に属する。漏尽は実際に心の発する光の色を見るという状態、視覚的に見るという状態、あるいは、声によって相手の煩悩を聞き分けるという状態、実際ににおいで相手の煩悩を嗅ぎ分けるという状態、そして触れて相手の煩悩を知るという状態、心の部分と直接コンタクトをとることにより、つまり、相手の心と自分の心を合わせて煩悩を知るという状態等いろんな状態がある。

他の神通力との違いは、これらの煩悩は、自分の内側に入ってきても、すべてその煩悩が自分のものでないということがはっきりわかるということである。つまり、煩悩と真我との区別がはっきりとしている、これが漏尽の状態なのである。

ところが、他心通、あるいは宿命通、死生智などの場合、その中に没入しているときは、その没入した世界と、それから見ている自分との区別がつきづらい。ここに、大きな違いが存在している。

◉犬から転生した子供を持つ母親の場合

次に、東京のOさんという女性から相談を受けたときの話をしよう。

その日、わたしはシークレット・ヨーガで、そのOさんから相談を受けた。六歳になる息子が、いまだに「ママ」以外の言葉をしゃべれない、ということだった。

このようなケースで、一般的に考えられるのは「精神薄弱」等の、いわゆる知恵遅れであろう。

しかし、この子供の場合は明らかに異常であった。それは、子供に対面した瞬間にわかったことである。

なぜなら、その子供は、いきなり四つんばいで足を後ろに蹴上げながら、わたしのところに跳んできて、わたしの足をペロッとなめたのである。その動作は、まるで犬であった。

そこで、わたしは子供の前生を透視してみた。思ったとおり犬である。犬の魂が、そのまま人間の子供に宿っているのである。

どうしてこんなことになったのか――わたしには、殺生のカルマが関係しているような気がしたので、母親に聞いてみた。

「あなたは、この子が生まれる前に、犬を殺しませんでしたか？」

と。すると、

「犬ですか……。」

と母親はしばらく考えていたが、思い当たることがあったらしく、

「そういえば……。」

と、次のようなことを話し始めたのだった。

「わたしは、この子を妊娠する前に、犬を二匹飼っていました。二匹とも雑種でした。そのせいか、夫はこの二匹を嫌って、いつもいじめておりました。そこでわたしは、夫に気に入ってもらえるように、血統書付きのセントバーナード犬を

飼うことにしたのです。二匹の雑種犬の方は、どうせいじめられるのだからと思って、保健所に連れいきました。そうです、保健所で毒殺してもらったのです。」

「その後、妊娠したのですね。」

とわたしは聞いた。

「はい、妊娠したのはその後すぐのことでした。」

「奥さん……これは間違いなく、その犬の生まれ変わりですよ。」

わたしは彼女にそう言った。

「では、この子は二匹の雑種のうちの一匹だとおっしゃるのですか？　そういえば、この子は父親がいくらかわいがろうとしても、決して近づこうとはしません。」

「この子を治すために、今までにどんなことをしてきましたか？」

わたしがそう聞くと、

「有名な霊能者のところへ連れていきました。そうしたら、この子がおかしいのは先祖霊の障りだと言われて。二年間、一所懸命に先祖供養をしてきました。で

も、全く変化がありませんでした。」

と彼女は答えたのである。

先祖供養――確かに、これはよく聞く言葉であり、それを重視している宗教団体や霊能者は多い。しかし、わたしに言わせれば、先祖霊の障りなどあろうはずがない。なぜなら、死後の魂は必ず生まれ変わっているからである。

したがって、この子供の場合、いくら真面目に先祖供養などしたって、変化がないのが当たり前なのである。

では、どうしたらこの母子が救われるのだろうか？　わたしはこの具体的な内容を指導する前に、今一度殺生のカルマによるものかどうかを確かめるべく、母親を室外に出して子供の様子を観察した。

「ワンワン」と子供は犬のようにほえる。自分で棒を投げては取る、ということを楽しんでいる。そして、何回も四つんばいのまま、足を蹴上げている。

「ベス」

と、わたしは、前もって聞いていた二匹のうちの一匹の名を呼んでみた。反応は見られなかった。次に、もう一匹の名を呼んでみた。すると、子供は全身に喜びを表わして跳んできて、わたしのひざにちょこんと座った。間違いない——わたしは確信した。彼は、二匹の雑種犬のうちの一匹が、毒殺された後に転生したものだったのである。

わたしは母親を室内に呼び入れた。そして言った。

「あなたは、犬に慕われていたのですね。」

「はい、ものすごくかわいがっていましたから。」

「そのようにあなたを慕っていた二匹を殺したカルマが返ってきたのですよ。もし、息子さんが正常になったとしても、彼の前世の記憶にある憎しみのデータによって、父親を殺す可能性があります。少なくとも、父親に対して暴力を振るうようになってしまうでしょう。あなたは、無智のカルマを持っていて、無智のカルマが殺生という行為のカルマをつくり出しています。いいですか。だから、あ

なたには無智のカルマを消す修行と殺生のカルマを消す修行の両方が必要です。両方やらなくては、決して幸福は訪れません。」

そして、わたしは母親に修行法を伝授したのだった。

これは、オウム真理教で行なわれている「ポアの集い」というわたしの説法会でのことで、すべて録音されている。

後で、テープを聞いたヤソーダラーが、不思議に思ったらしく、

「どうして最初から殺生が原因しているとわかったのですか。」

と質問してきたものだが、これも漏尽通によって知り得たことだったのである。

◉煩悩の多い老年の弟子の場合

次の例にいこう。あるサマナが出家し、そして酒に対する煩悩で苦しんだ。もともとこのサマナは年齢も五十歳を過ぎており、そして社会的にいろいろな経験をしているがために、煩悩もかなり多くのものを有していた。このサマナに対して、わたしは修法したビールを飲ませることに決めた。

もともと、ビールを飲ませるということは戒律に違反する。なぜならば、ビールを飲むことにより、放逸、つまり怠惰になるからである。しかし、それまで全く修行のできなかった彼は、わたしが修法したビールを二十本、一日だけ飲むことにより、それから大変な神秘体験を始め、そして修行に没頭したものである。

これは、そのサマナがもしビールを飲まなければ、還俗（げんぞく）し、そしてそこから完全に修行者としての縁が切れるとわたしは見たから、修法したビールを飲ませたのである。それによって、彼は今も修行を続けている。

尊師が直接触れて神聖なエネルギーを移入する秘儀、シャクティーパット。このようなイニシエーションによって、弟子たちは確実に修行ステージを上げ、煩悩から解放されていく。

◉酒に執着したM子さんの場合

M子さんという女性がいる。このM子さんは性格は大変真面目である。そして、その真面目なるがゆえに、自分の煩悩というものがどうしても許せないと。そして、許せない自分の心と、それから煩悩との対立で苦しみ、何度かサマナから落ちたことがある。

このサマナは、お酒が好きであった。そして、お酒を飲みたいがために、下向しようと考えた。わたしは、おみやげ用に買ったブランデーがあったので、そのブランデーを修法して彼女に渡し、飲ませた。彼女は、それによりしばらく修行ができるようになった。しかし、それは本質的な解決にならない。彼女は、また酒が飲めないことによって苦しんだ。そこでわたしは、次は日本酒を修法して渡した。彼女はそれを飲み、そして教学をすることにより、徐々に徐々にデータが入れ替わり、今では立派なサマナ生活を続けている。

◉美女に囲まれたいと願ったU君の場合

次は、U君の場合である。彼は、ムーディストであり、転輪聖王（てんりんせいおう）願望が強かった。わたしはそれを、彼のエネルギーと彼の心が発している光の色を見て知った。

そこで、「徳を積むことによって、それがかなうんだ」というアドバイスをしたのである。むろん、わたしの本意は彼の望みをかなえることではなく、功徳を積ませて修行を進めさせることであった。彼はといえば、いくら否定したとしても、潜在意識にそれがあったので、黙々と功徳を積むようになった。

これはサキャ神賢が、いとこのナンダに修行をさせようとして採った方法と同じである。サキャ神賢はナンダを天界へと連れていき、美しい天女たちを見せて言ったのである。

「修行すれば天界に生まれ変わり、この美しい天女たちを自分のものにできるのだ。」

と。

その後、サキャ神賢はナンダを真の修行者へと導いていくわけだが、それはさておき、功徳を積んできたUは、その功徳によって今は大変美しい女性たちにかしずかれている。

そして、その状態を味わせた上で、それは苦であると教えていっているのであるが、まだ完全にそういう心を捨断し切れず、マハー・ムドラーの成就には至っていない。

なお、多くの女性にかしずかれることによる苦とは、女性間の嫉妬によっての影響や、修行に対する欲求を女性によって妨げられたりすることなのである。

◉広い心を求めたG君の場合

次は、G君の場合である。G君は大変優秀な大学院生であった。彼は、在家のころからいろいろな神秘体験をしていた。彼は、神秘体験のための修行と、それからセミナーへの参加、お布施の実践といったようなことは好んで行なっていた。しかし、あくまでもその修行は自分個人のための修行であり、それゆえに彼の心というものは大変固く、そして心の幅が出ずに悩んでいた。

わたしは、彼を期間を決めて出家させることにした。つまり、一カ月間だけサマナ修行を行ないなさいと。彼は、一カ月間サマナの修行を行なった。その結果、そこで大乗の思想、その他をいろいろ植えつけられ、そして心が柔軟となった。

彼は、そこで約束どおりいったん還俗した。しかし、もともと賢い彼は、その現世の生活とそれから出家修行者の生活との差、これをしっかりと見、そして自分自身にとって、結局出家修行がいかに価値のあることであるかということを認

識したのである。

つまり、ここでわたしが見切ったのは、彼の知性、そして彼の霊性である。もともと知性、霊性の高い人は、どんどん先へ進めてあげ、そしてそれにより高い経験をさせることによって、自分の可能性というものを自分自身で体験させる。これが一番早道なのである。

人間世界とそれから天界へ至り、最終的には神聖天界（しんせいてんかい）、あるいは煩悩破壊界へ至るサマナの世界、その空間のエネルギー、あるいはそこで修行している人たちの心と、現実生活の悲惨さを比べたら、やはりサマナの世界の方が数段上である。いったん還俗させたとしても、彼だったらそのことにすぐ気づくとわたしは考えたのである。

◉異性の誘惑を切ったS子さんの場合

S子さんという人がいた。彼女は、大変気の弱い子で、そして異性に誘惑されると即その誘惑に乗ってしまう。もちろん、誘惑されるぐらいであるから、もともとスタイルもよく、大変美人であった。しかしわたしは、彼女がそのような経験を続けるごとに、あるいはそこから派生する例えば堕胎の経験等を行なうことによって、彼女の人生が相当にねじ曲がり、そして苦しみがどんどん増大するということを知っていた。

よって、わたしは彼女にそのような法を説き、そして、実際はそのような行為を、つまり異性と気軽につき合うという行為をやらない方がいいという話をした。

もちろん、そのような話だけで、人の傾向というものが変わるわけではない。わたしは、彼女に対してはより高い意識を持たせるために、特殊な修行――これは特別な呼吸を整える方法があるわけだが――その特殊な修行を徹底的に行なわ

せることにより、エネルギーを上昇させた。この特殊な修行を行なうことにより何が起きるのかというと、より高い意識、あるいは自分の潜在意識へと到達できるのである。

彼女はそれにより、徐々にカルマの現象が早くなり、そして本質的に愛していない異性と付き合うことは自分自身を苦しめるんだということに気づき出した。そして徐々に徐々に異性との関係が遠のき、今では完全に異性を捨断し、そして出家し、立派に救済活動の手伝いをしている。

これは、単純に煩悩や習性の捨断を教えだけによって導いたとしたならば、済度されなかっただろうということを表わした一例なのである。

◉食欲に悩んだT君の場合

T君という子がいた。T君は東大生で大変優秀であった。彼は、専門分野でその学年でトップに立つぐらいの成績を修めていた。そのT君は、学業において大変真面目で、そして論理的に追求する心も、人並外れて持ち合わせていた。しかし、彼は貪(むさぼ)りのカルマをなかなか切ることができず悩んでいた。つまり、食べ物に対する執着があり、その執着を切ることができず悩んでいたのである。

わたしはT君に対して、その好きな物、一つ一つを言いなさいという話をした。彼は好きな物を列挙した。わたしはそのすべてを大量に用意し、そしてそれを厭(えん)逆(ぎゃく)させながら、彼に食べさせることにした。彼は、それを食べたことにより、食べ物に対して、その大量に食べることが本質的には苦しみなんだということ理解し、それを数度経験し、その後食の煩悩から離れることができた。

これは、彼がもともと論理的な思考をなすことができる人であり、そして修行

に対してしっかりと目的意識を持ち、グルに対してある程度の帰依ができているという条件を備えていたからこのようなことができたのである。もし、彼に帰依の心が弱ければ、食べなさいといってもわたしは食べたくないということで、結局彼は煩悩を持ち続け、その煩悩を越えることができなかったであろう。

◉異次元で噂になったU君の場合

次は、U君の場合である。ある日、死の瞑想をしている最中、わたしの変化身はどんどん暗闇に吸い込まれていった。そして、わたしの体は、異次元における、このオウム真理教の道場のある場所と同じ場所に立った。つまり、愛欲界の空間の裏側にある、アストラル空間に立ったということである。

そこには現実世界と同じように弟子たちも存在しているのだが、わたしは、よくそこで、サマナその他に質問をして回る。それは何についてかというと、

「どのサマナが真面目に修行しているか。」
あるいは、
「どのサマナが修行していないか。」
あるいは、
「どのサマナが戒を破っているか。」
あるいは、
「どのサマナが戒を破っていないか。」
といったようなことである。
いつもと同じように、わたしの変化身はサティアンビルから道場に向かって歩き出した。すると、三名のサマナが、噂話をしていた。
「ねえ、ねえ、知ってる？　A子さんがU君とどうも戒を破ったみたいよ。」
わたしは、そこへ近づいていき、もう一度教えてくれないかというふうに、その三人のサマナに聞いた。すると、実はA子さんが、それについてずいぶん悩ん

でいるのだというのである。
「これは、まずい。」
わたしは、早速アストラル空間から自分の肉体に戻った。そして、A子さんに電話をしたのである。
「あなたは、U君と戒を破っているんだね。」
「実は、ザンゲをしたかったんですけども。」
A子さんの返事は、こうだった。実は、そのU君には、三日前にわたしは直感で、
「君は、A子さんと戒を破っているんじゃないか。」
という質問をしたばかりだったのである。しかし、U君は、
「いや、そんなことしていません。」
と、わたしに返事をしていた。
それからわたしは、A子さんとU君をわたしの瞑想室に呼び、修行を続けていくのか、それとも還卑(げんぴ)するのかを問うた。

「いや、いかなる律でも受けますから、とにかく修行を続けさせてください。」

と、二人はわたしに言った。

「よし、わかった。では、律を受けて早く今の煩悩を切り、そしてもう一度教義をしっかり理解し、次のステップの修行に入っていきなさい。」

という話をして、わたしは二人を帰したのである。

これも、広い意味での漏尽通に含まれるのだ。

◉美人に対する幻影を切ったJ君の場合

ところで、チベット密教に、偉大なグルとして称賛されているティローパがいる。このティローパは、ナローパに対して、偉大な覚醒を与えるとき、最後は自分の靴でナローパの頭を殴り、そして覚醒を与えたといわれている。

これは、ティローパが偉大なる成就者であり、そしてナローパのカルマを完全

に見切り、ナローパの管の詰まりと、そしてそれまでなしてきた暴力のカルマを取り除くために靴で殴り、それによって覚醒させた一例である。このようなことはオウム真理教の中でもいろいろと起きている。

結局のところ、グルは弟子に対して、弟子を人と見るのではなく、カルマの集積というふうに見るのである。つまり、形状-容姿に対してどのようにとらわれているのか、あるいは感覚に対してどのようにとらわれているのか、あるいはイメージに対してどのようにとらわれているのか、あるいは自分自身のなした経験に対してどのようにとらわれているのか、あるいは、その彼はどのような識別を有しているのか。そして、これらの弟子たちの五つの愛欲の構成要素のカルマの集積を見切って初めて、グルというものが成立するのである。

では、もう一ついこう。

J君という弟子がいた。彼は、大変、美しいものにこだわっていた。この美しいものにこだわるというのは、美しい人、つまり美しい女性イコールいい人という観念であった。そこでわたしはその美しい人、何人かの例を挙げ、そして実際、彼女たちがどのような心の持ち主であるかをJ君に直に体験させた。もちろん、顔と心とは別物である。彼は、美しい人イコール善人であるという観念を崩壊させ、それから美しさにとらわれなくなった。

◉観念を崩壊させた専門家の弟子の場合

では、最後にもう一つ例を加えて終わりにしたい。

わたしは、よくその専門分野で弟子たちと討論することがある。例えば名医と称されたG君やK君と、その専門について話をするわけである。そして、治療法、

あるいは医学知識を話し合う。

だいたい、わたしは今まで専門家と専門分野について話をして負けたことがない。そこで彼らは、自分自身の経験、その経験が完全ではないこと、あるいは知識が完全でないことを悟るのである。

彼らは、その知識が完全でないことを悟り、よりいっそう医学の知識を磨こうとするし、またよりいっそう智慧を磨こうとするわけである。これは、まさに経験の構成を崩壊させるための漏尽証解智の使い方なのである。

その二　弟子が体験したグルの漏尽通

次に、実際に指導される立場である弟子たちは、わたしの漏尽通をどのように受け取っているのだろうか。その実例をご紹介するために『神通力（じんつうりき）――麻原彰晃は魅せた！』（オウム出版）からいくつか抜き出しておくことにしよう。

◉尊師からの戒め

中村　昇（ウパーリ）

その日わたしは、セミナーで食事の手伝いをしながら、他の人とのおしゃべりに夢中になっていました。

そしてその手伝いが終わって部屋へ戻るとき、尊師とすれ違ったのです。そのとき尊師に、

「口の修行の方は進んだか。おしゃべりはアストラル・エネルギーのロスになるから、無駄口は控えなさい。」

と、厳しく言われました。まるでそばで聞いていらしたかのようです。

わたしは、「グルはいつでもわたしたちをご覧になっておられるのだ」と思いました。そして、尊師は弟子が何をしているのかをすべて把握していらっしゃるということを、そのとき改めて認識したのです。

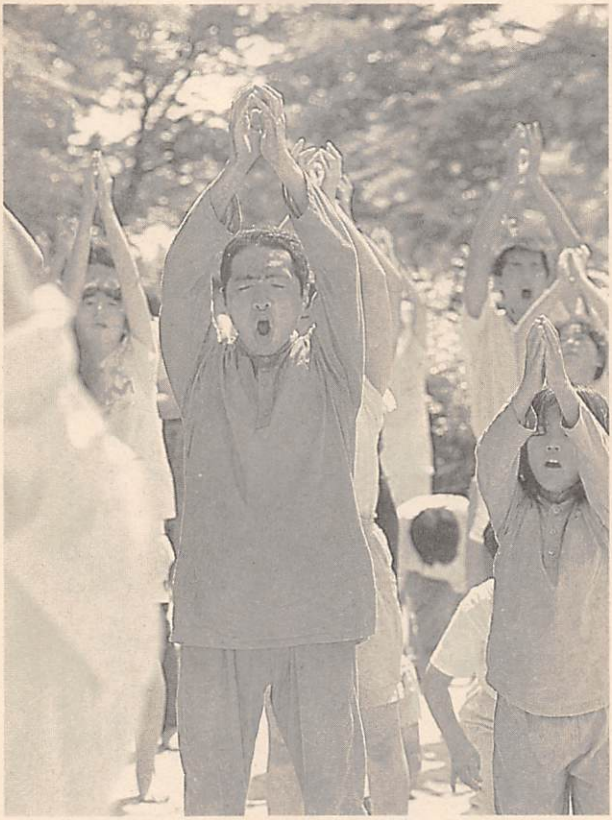
◉頭の中の曲を聴き取る

山田泰明（ヴァッパ）

わたしが尊師をご自宅から送り迎えしたときのことです。

隣に座っていらした尊師が、急にテレビ・アニメのテーマソングを口ずさむのです。それは、わたしが昔よく聴いていた曲でした。

「どうしたんですか。」



立位礼拝という修行を行なう弟子たち。彼らは、いつの日かグルのような神秘力と四無量心を身につけるため、日々精進している。

とわたしが聞くと、

「いや、泰明の頭の中からこの曲が聞こえてきてな。」

と、尊師はおっしゃるのです。どうやら尊師は、わたしのコーザルのデータを読み取ったらしいのです。

あと、こういう話もありました。

六十二年の冬のことです。オウムのスタッフは、自らの修行のため、一般世間の音楽を聴いてはいけないことになっています。ところがそのときは、スタッフのある人が、ビートルズの『レット・イット・ビー』を聴きながら、否定的な話をしていたのです。すると、尊師から急に電話が来て、こうおっしゃるんです。

「『レット・イット・ビー』もいいけど、ちゃんとやれよ。」

そのとき、尊師は自宅にいらして、そこからは二百キロ以上も離れていたのです。

また、こういう話もあります。

尊師とラクシュミー大師（現在のサクラー正悟師）が九州へ行かれる飛行機の中でのことです。尊師はお疲れで、すっかりお休みになっていました。ラクシュミー大師はふと、「ジャズを聴こうかな」と思ったそうです。

結局聴くのはやめたそうですが、尊師は目覚められると、こうおっしゃるのです。

「ラクシュミー、お前ジャズを聴こうとしてたんじゃないか。」

尊師には、ラクシュミー大師の頭にあったジャズのメロディーが聞こえていたそうです。

◉隠し切れない引っかかり

二宮耕一（アッサージ）

オウムのサンガに入ってすぐのことです。

そのころのわたしは、親子の縁で引っかかっていたんです。そんなとき、尊師

がいらして瞑想指導をしてくださいました。

その瞑想とは、四無量心の平等心についてのものだったのです。その中で、親子の縁についての話があったのです。それを聞いたら、わたしの中にあった、親子の引っかかりがスパッとなくなったのです。

尊師のご指導が終わって、サンガの連中がずらりと並んでいるのですが、尊師がわたしの前で止まり、

「わかったか。」

とおっしゃいました。わたしの心の揺れは、すべて見抜かれていたのです。

あと、わたしが一人で仕事をしていたときのことです。尊師がいらして、わたしにアドバイスをしてくださいました。

「お前はこういう性格だ。それを××というんだよ。」

そういうようなことを言われたんですが、わたしはその××という単語の意味がよくわからなかったのです。そこでわたしは、「そうなんですか」と言いなが

ら、あとで辞書で調べようと思っていました。

すると、その後の夜礼の中で、尊師はこうおっしゃったのです。

「二宮みたいに、いちいち漢字を辞書で調べないで、さっさとやればもっとスピーディーに行くんだがなあ。」

つまり、わたしが心の中で辞書を引こうと思っていたことが、すっかりばれていたのです。

◉ダルドリー・シッディの心遣い　早川紀代秀（ティローパ）

「君はあと三カ月で、ダルドリー・シッディが起こるよ。」

尊師にそう言われて三カ月経ったとき、本当にダルドリー・シッディが起こったのです。ダルドリー・シッディなど、大阪支部では初めてだったので、だれも知らなくて、みんな驚いていたわけです。すると、尊師から電話が入りました。

「毛布を敷いてあげなさい。」

わたしは、「だれかが電話したんやな」と思っていたのですが、だれも電話などしていないのです。尊師から突然電話があったということでした。

それを聞いたとき、「なんでわかるんや」と驚いてしまいました。

そのとき、マンションの一室の硬い床の上で修行をしていたのです。体が跳ねる度に、お尻が痛くて仕方がありませんでした。ですから、尊師のお心遣いは非常にうれしいものとなりました。

◉見抜かれた煩悩

杉本繁郎（ガンポパ）

六十一年十一月、オウムが渋谷から世田谷に移って間もなくのことでした。当時、精神状態が極度に不安定だったわたしは、

「もうオウムなんかやめてしまおう。実家に帰って現世的な生活をしよう。」

と考え、夜、皆が寝静まったとき、還俗しようと考えていました。しかし、決行の時機を逸してしまったのです。

数日後、尊師が道場にいらっしゃったとき、わたし自身の精神状態の推移について細かく述べられ、

「〇日から〇日にかけて逃げ出そうと思っていただろう。すべて知っていたよ。」とおっしゃったのです。

わたしはただぼうぜんとしているだけでした。尊師は百キロメートルほども離れた所にいらっしゃったし、わたしは自分の考えていることはだれにも話していなかったのです。しかし、尊師はわたしの心の中をすべて知っていらっしゃったのです。

「グルと弟子の関係においては、時間、距離は一切関係なくなってしまう。グルはいつも見ている」といわれますが、このときほどこれを実感したことはありません。

その三　会った瞬間すべてを見抜く〈質疑応答編〉

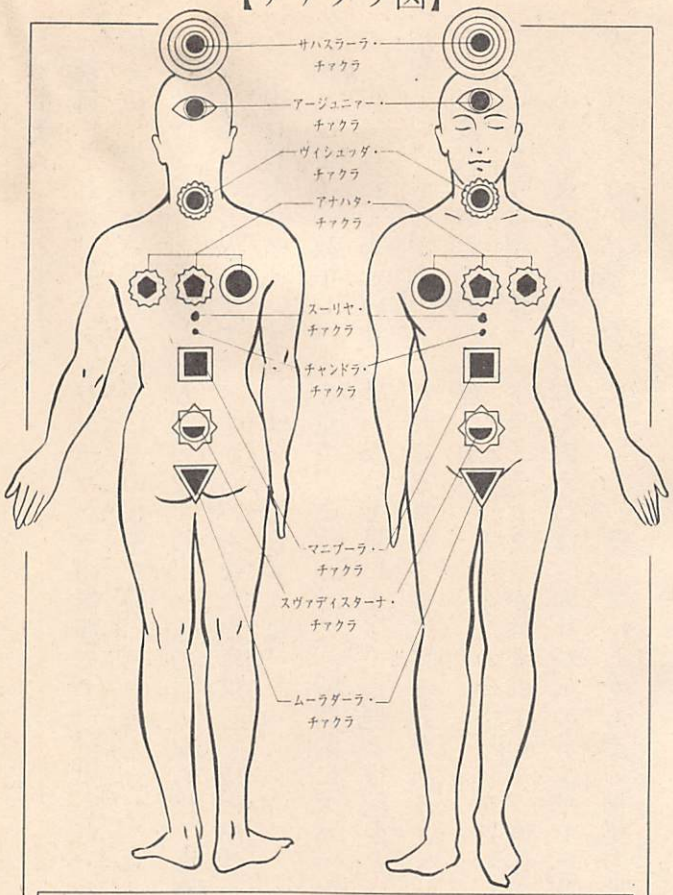
最後に、わたしが説法会などで信徒、あるいは直弟子から受けた質問に漏尽通を使って答え、彼らを導いている例をいくつか挙げておこう。

◉瞬時にすべてを知る

（質問者A）一般の者なのですけれど、今、真理に迷っている状態なんですが。

（尊師）ちょっと一つ質問しましょう。あなたの今の状態を見ていると、チャンドラ・チャクラが開いていますよね。そして、チャンドラ・チャクラが開いているということは、神秘体験も含めて体のコンディションもあまり良くないんじゃないかな。

【チャクラ図】



—チャクラ—

チャクラとは、人間の身体にある霊的なセンターで、主なものは七種である。しかし、普通の人はそれが眠った状態で働いていない。訓練によって開発されるのである。

また、チャクラは、身体の下部に位置するものに比べ、上部へいくほど次元が高くなっていく。

超能力もこのチャクラが司っているのだ。

（質問者A）そうですね。

（尊師）それは、チャンドラ・チァクラの影響です。ですから、あなたが今の状態を抜け出さない限り、永遠にその状態が続くとお考えください。そして、あなたはチャンドラとかなり縁が深いですね。一言で言うならば、今魔境だとお考えになっていいと思います。ですから、あなたが意思して抜け出さない限り、あなたに絶対的な幸福というものはないでしょうね。

例えば日本の教祖レベルを見て、こうやって、瞬間的にズバッと相手の状態を言い当てられる人というのはいないと思います。真理とは何かというと、ここに現象というものがあって、これをありのままに見る力があることです。そして、それが真実であることが真理です。

で、あなたは現にチャンドラ・チァクラがけがれていて、肉体のコンディションがあまり良くない。言い方を換えれば、周りからエネルギーを吸収しなければやっていけない状態になっていると。そして、しかもその神秘の世界に引きずり

込まれていて、その神秘の世界も決してあなたにとってプラスになる世界ではないと。

いいですか。そこから抜け出せないということは、あなたの心の中にけがれがあると考えた方がいいです。つまり、ありのままに見られない。

質問してよろしいですか。あなたは、前の宗教にたくさんの人を入信させたことはありませんか。

（質問者A）あります。

（尊師）そのカルマです、それは。つまり、あなたが正しくないものに引きずり入れたがために、真理をありのままに見られなくなっているカルマなんですね、これは。

（質問者A）わたしのカルマを清算するために、今わたしのなすべきことは……。

（尊師）真理の実践をして、彼らをその間違った宗教から真理へと引きずり戻さなければならない。それをやらない限り、あなたは完璧に魔境の状態で転生す

るでしょう。

だから例えばね、同じ状態にある方でも、自分だけが正しくないものに引きずり込まれた場合、あっさりと抜け出せるんです。ところが、たくさんの人を引きずり込んだ場合はなかなか抜け出せない、これは。それがカルマというものです。それはそうでしょ。足を片方突っ込んだ状態と足を両方突っ込んだ状態とでは、足を両方突っ込んだ状態の方が抜け出しにくい。

（質問者A） それは、前世のカルマが非常に強いためでしょうか。

（尊師） そうです。そうお考えください。真理を実践しない限り、抜け出すことは不可能でしょう。

その宗教の教義自体にどうこういうつもりはありませんけども、あなたの今の状態から脱却する道は、今のところ提示されていないと思います。そしてそれは何年経とうとも、どれだけお布施をしようとも、やればやるほど深みにはまっていくはずです。しかし、最後に判断するのはあなたですからね。

真理であれば、今みたいに瞬間的に会って、あなたのすべてがわからなければならないわけですね。それが真理というものです。言い方を換えるならば、あなたは、たくさん覚醒剤を打っている患者のようなものですね。

だから、そのためにはたくさん薬を投与する、あるいは覚醒剤が切れるまでじっと待つしかないわけです。そして、その覚醒剤を取り除く方法というのが真理なんです。だから、できるだけ早く心を入れ替えなさい。

◉エネルギーと前世を見る

（質問者B）まだ入信していないんですが、守護霊のことについてお伺いしたいんです。今、現在もそうなんですけれども、九年前から、すごい不思議な体験をいたしまして……。

（尊師）はい、どういう体験ですか。

（質問者B）五十四年の春分の日です。それまでも少し、霊的に高ぶっている状態が三、四カ月続いてまして、ヨーガとか、あまりそういう知識はないんですけれども、会社に行ってるときも、途中で仕事を抜け出して、二十分くらい、霊に瞑想をさせられたんです。それをやり終えると、力が出てくる状態で、仕事が続けられたんです。

そして、三月二十三日、夜ですね、アパートで寝ておりましたら、戸がガタガタ、窓がガタガタって音がしましてね、目が覚めたんです。すると、お二人の存在っていうのがわかったんですね。何者か全然わからないんですけど、何か怖くないんですよね。それで、いろいろ指示されるままに……。

（尊師）その指示はどういう形で起きましたか。

（質問者B）インスピレーションです。そして、恋愛問題でノイローゼになったという狂言もさせられました。

（尊師）わかりました。一つ質問しましょう。今、あなたのエネルギーを見てま

すと、すごく悲しみのエネルギーが強いんだけども、どうですか。幸福ですか、不幸ですか。

（質問者B）今は道にもう迷っているって感じです。何をするべきであろうかと。

（尊師）そのときに背景として、悲しみの感情はありませんでしたか。

（質問者B）ありました。もう、小学生のころからずっとありました。

（尊師）そうですね、その心の働きによって、霊界とつながったんですね、それは。ですから、悲しみの感情で導き出したものは、あなたを幸福にすると思いますか。それとも不幸にすると思いますか。

（質問者B）不幸にすると思います。

（尊師）そうですね。だとしたら、早くその世界から縁を切るべきでしょう。今、あなた何か宗教をお持ちですか。

（質問者B）一年半前まで、Mという手かざしの宗教をしていました。

（尊師）まず、あなたがなさなければならないことは、心の開放です。それは、

悲しみからの心の開放です。それをなさることによって、あなたは、すべてが明らかになるでしょうね。もともとアナハタ・チャクラの力は強いですから、心の働きをね、まずお知りになって、そして、もしあなたがその心を開放することがおできになったならば、正しい結果が出てくると思います。

もう一つ質問しましょう。そうなられる前には、宗教は否定も肯定もなさっていなかったんじゃないですか。どうですか、それは。

（質問者B）そうですね、何かこう無縁なものというようにとらえていたと思います。

（尊師）そうですね、そういう心の悲しみがだいたい出る場合というのはね、背景に無智の感情があるんですね。ですから、今までのあなたの宗教歴を見ても、おそらく真理に巡り合ったのはここが初めてだと思います。そして、わたしはあなたのこの偉大なカルマ、素晴らしいカルマに対してお祈りをしたい。ここで早く心を解放なさったならば、今あなたのね、悩んでいらっしゃる部分というもの

は、必ず取り除けると思いますよ。それは大した問題ではない。

そしてね、もう一つは、守護神の話ですけど、それは守護神ではない、一言で言うならば。それは低位の霊界の住人だとお考えください。なぜなら、もしあなたの守護神でしたら、あなたに狂言的な恋愛のね、演技をさせるようなことはしません。

そしてね、あなたの前世の中に巫女のカルマがありますから、その巫女のときのカルマ、要するにオラクル、憑依ですね、俗にいうところの。他の魂があなたの身体に乗り移るという、そういう現象の経験を前世でお持ちです。ですから、その影響によって今がありますので、それを早くまず消滅してしまわないと、自己の心の働きというものを本当におできにならないで他界してしまうことになると思います。そうすると、また迷妄の状態で次の生が展開されることになります。そうお考えください。

ですから、早く修行にお入りになって、そして真理の実践を始めてください。

もともとアナハタ・チァクラの働きが強いですから、きっと正しい信仰、正しい修行をなさったならば、ね、他の人よりも、早く結果が出ると思いますよ。頑張って乗り越えてください。

◉ガン回復のアドバイスを伝授

（質問者C）個人的なことでちょっと申し訳ないんですけども、わたしのおじが直腸ガンであと三日の命だといわれたんです。それで母親が、東京のT大附属病院に出て行ったんですが、そのときにわたしの手元に、プルシャ型たまて箱（香りのイニシエーション）ですか、あれがあったので、持たせてあげたんです。

それで、母親はそれを持っていったんですが、その晩は病院に泊まることになったので、おじにそれを何度も嗅がしてあげたんです。それがちょうど前回のポア・セミナーの前日なんですが、なんといまだに生きているんですよね。三日の命だ

と言われたのが。で、医者も不思議がっていると。

で、僕はどうせ三日の命だから駄目だろうと思って、まあ死ぬんだったら少しでも高い世界に連れていってあげようと思ってプルシャ型たまて箱を持たせたわけなんですが、思いもかけず命が延びてしまったので、今度はじゃあどういうふうにしてあげたらいいのか、ちょっとわからないのでお聞きしたいんですけども。

（尊師）次は甘露水だね。

（質問者C）甘露水？

（尊師）うん。だから、地元素の浄化が起きたんだろうね。つまり、プルシャ型たまて箱は地元素の浄化をするためのものだよね、ムーラダーラ・チャクラと関係して。で、次はまあサット・プラーナ神水にしろ、甘露水にしろそうだけど、水元素を強化・浄化するものがいいよ。で、それでもし生き延びるようだったら、次はまあ順番としては火のイニシエーションという形になると思いますね。それによって延命は進んでいくんじゃないかな。

（質問者C）あ、そうですか。では、甘露水を飲ませればよろしいわけですか。
（尊師）うん、飲ませればね。
（質問者C）はい。わかりました。ありがとうございました。

◉気の状態を見る

（質問者D）仕事の都合でちょっといろいろと環境が変わって、行法とかも前は結構やっていたのができなくなっているんですね。
それと関係があるのかどうかわからないんですが、前はアストラル音楽の「ロード・シヴァ」を聴いていたら、耳が感応して連打するように振動が起きたりしていた時期があったんですが、今はそういうアストラル音楽を聴かなくても、自然に耳の方が感応するんです。
それから、瞑想のときにいろんなチャクラを意識したりしていると、心臓の方

がチクチクしたり、腹と胸の間がチクチクしたり、そういう状態になっているんですけど、それが一体どういう状態なのか……。

（尊師）一つ言えることは、多分ナーディーのイダー管、あるいはピンガラ管が少しずつ少しずつ通って、クンダリニー、あるいはアパーナ気がね、少しずつ少しずつ上がっている状態だと思いますね、それは。で、問題なのはあまり指導を受けていないじゃないかな。

（質問者D）ええ。いろんなところに出張に行ったりする関係で……。

（尊師）でしょう。まあ、オウムは全国に支部がありますから、それはできるだけ、例えば夜間セミナーだとか、あるいはイニシエーション準備コースにお出になって、そして指導をお受けになった方がいいと思いますね。というのは、放っておけば、いずれ魔境に入るか、体を壊す結果が出てくるかもしれません。

いや、というのは何かというと修行が進んできているからなんだよ。

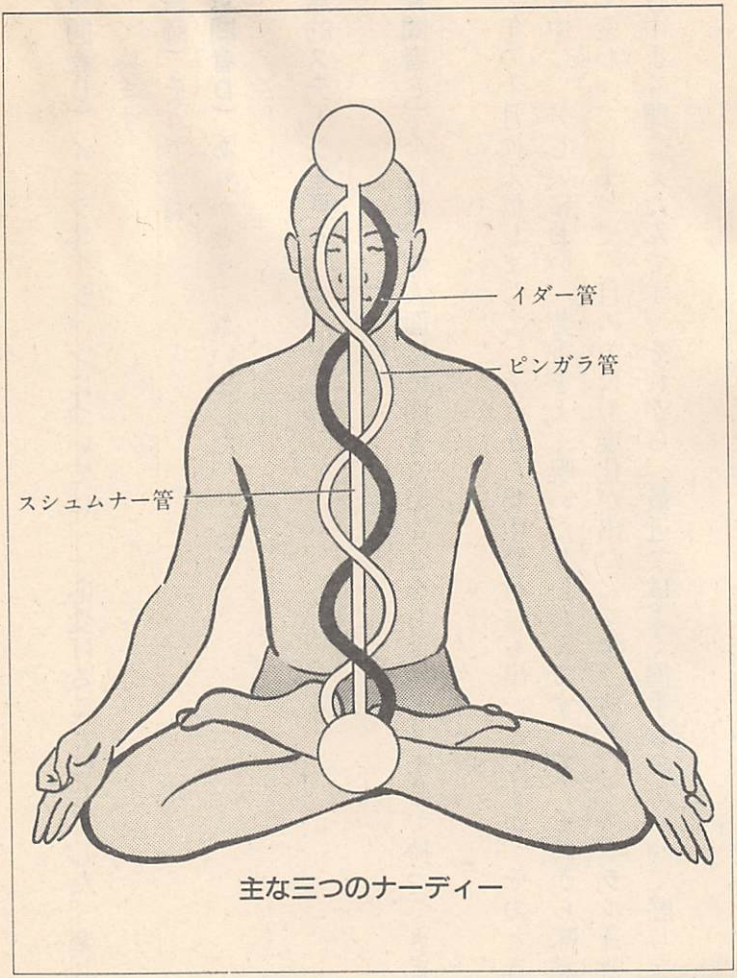
（質問者D）あ、そうですか。

（尊師）うん。特に上に行けば行くほど指導が必要です。だから、ガイダンスを受けることがまず望ましいと思いますね。

（質問者D）自己流でやるとよくないんですね。

（尊師）そうです。それは必ず魔境に入るか、あるいは危険な状態になるでしょうね。だから、指導を受けたいときだけでもいいから、コースにお出になるとか、そういうことが必要でしょう。

それからもう一つは、やはりシャクティーパットを含めたね、イニシエーションをお受けになった方がいいと思いますね、その状態だと。で、それをやることによって、よりいっそう早くね、ナーディーの浄化が起きますから。まあ、例えばチッタ尊者（現在のマルパ師。在家でクンダリニー・ヨーガを初めて成就した）の場合は、シャクティーパットだけでも十何回受けてますからね。だから、それはもう本当にイニシエーションをお受けになって、自己をお磨きになった方がいいと思います。



主な三つのナーディー

（質問者D）イニシエーションについては、一応受けることにしました。楽しみにしています。

（尊師）そうですね。

（質問者D）ありがとうございました。

◉霊的ステージを見る

（質問者E）今日は、個人面接で聞きたいことをちょっとメモして持ってきました。

去年の十月に入信しまして、それから集中修行にも出たんですが、そのときの修行中に、芳しいにおい、芳香をよく嗅いだりしたんです。で、それから味覚が全く変わってしまって、目の方にも変化が出たんです。あと、アストラル音楽も修行中よく聞こえたんです。それから、最近ではよく握手したがるって感じなん

ですね。こういうふうな経験をですね、今積んでいるわけなんですけども、自分が果たしてどのくらいのステージにあるのかということをお教え願いたいんですが。

（尊師）それは、ムーラダーラから一つずつ経験していますよね。あなたもご存じのとおり。例えば、においの経験、味の経験、視覚の経験、そして触覚の経験と。で、音がね、作られた音であるかとか、まあ音の種類によって違うわけだけど、少なくともアナハタのステージに入っていることは事実でしょうね、チャクラの世界でいくと。

そして、問題はアナハタからヴィシュッダに入ったときに、きちんと帰依ができていないと、大魔王の世界に入ってしまうと。だから、今からこそ本当の修行ですね。

（質問者E）わかりました。頑張ります。ありがとうございました。

◉エネルギーの詰まりを透視

（**質問者F**）Pです。最近、非常に自分としてはいろんな意味で追いつめられるというか、精神的にも肉体的にも、非常につらい状態になってしまっています。例えば対人関係的においてもそうで、いろいろ自分で考えて、担当の師にも相談して、できる限りのことはやったんですが、これ以上自分でどうやったらいいのかわからない状態なんです。

それだけでなく、自分の中にある帰依とか信とかそういうものも何度もつぶれて、もう一回それを積み上げていくという形で今ここまで来ているんですが、どうしたらいいかわからない状態なんで、ご指導していただいたらありがたいんですが。

（**尊師**）Pの例を挙げると、まず以前に比べてはっきりと引っかかりが出てきていると。それはプライド、卑屈、これがPの今までなされている修習の最も大き

な問題点であると。それによって、ナーディーがアナハタ・チャクラのところでちょうど結、つまり結びをつくっていて、エネルギーの流れがそこから上がらなくなっていると。

ということは、ムーラダーラから上昇したエネルギーはアナハタまで上がったらどうなるかというと、また下降すると。ということはどういうことかというと、嫌悪――おそらく今の状態はね、嫌悪、無智、貪り、卑屈、これを交互に経験しているんじゃないかと思います。

（質問者F）はい、そのとおりです。

（尊師）これは、アナハタの結を取り除く、つまり卑屈の意味合い、三つの慢というものの意味合いをしっかりと理解することによってその結が破れます。破れることによって、ヴィシュッダ、アージュニャーへとエネルギーが上昇していくようになるはずです。その段階で、苦しみから解放されます。これがクンダリニー・ヨーガのプロセスです。

そのためには、Pはすごくいい環境にあると思うんだね。つまり、教学ができる環境にあるわけだから、ひたすらザンキの念、ザンキについての教学をすることによって、その結が破れ、今の苦しみから解放されると思いますよ。

（質問者F）わかりました。

（尊師）だからね、多くのことをやる必要はない。プライド、卑屈といった部分だけが引っかかっているわけだから、そこだけを集中的に破壊すると。滅尽すると。そうすることによって苦しみから解放されるはずです。それを貪・瞋・癡についてまでやろうとすると、時間が四倍かかるしね、集中が四分の一に欠けます。いいですか。

（質問者F）で、例えば他人に対する対応とか経験的な部分で自分に欠けているものというのは、これからの修行の中でも十分補っていけるものなんでしょうか。

（尊師）それは十分補っていけると思います。

（質問者F）わかりました。どうもありがとうございました。

◉エネルギー状態を見る

（質問者G）ヴァアヴィヤ・クンバカのことでお尋ねしたいんですけれども、しばらく前からすごく保息していることに恐怖心が出てきて、五十秒くらいで息をもう吐いてしまうようになってしまったんですね。

で、それではいけないということで、少しずつでもやって伸ばしていこうと思って、今日は百秒から百十秒くらいまでいくようになったんですけれども、今度はダルドリー・シッディが起こらなくなってしまったんです。トライバンダしている以外の余分な力を全部抜いていて、体をリラックスした状態でやっていたんですけれども。

これは保息がまだ足りないからなのか、それともまた他に原因があるのでしょうか。エネルギーは上がってくる感じがして、こう快感がずーっと上がってきて、

後頭部が熱くなるんですけれども、もっと保息した方がいいのでしょうか。

（尊師）以前はダルドリーは起きてた？

（質問者G）起きてました。

（尊師）以前は後頭部まで熱くなっていたか。

（質問者G）なっていました。

（尊師）なってた。

（質問者G）はい。

（尊師）同じ状態か。

（質問者G）同じ状態でした。

（尊師）わたしは違うと思うけどね。以前は、特に背中の方が強く感じてたんじゃないかと思うんだけど。

（質問者G）あ、そうかもしれません。まだ頭の方に行くのが少なかったような気もしますけど。

（尊師）でしょ。それは抜けてきているんです。だから、ダルドリーを気にする必要はありません。

（質問者G）ないですか。とにかく保息すればいいですか。

（尊師）そうです。

（質問者G）はい、ありがとうございました。

◉心の内側を見る

（質問者H）Kです。先程の説法で今年中に二百名の成就者を出すとおっしゃいましたが、レインボー・ステージのブハーではその成就者のメンバーには入れないんでしょうか。まだ、出家して間もなくて、今ブハーのステージなんですが。

（尊師）レインボー・ステージはあまり成就には関係ないね、今のところ。今まで見てた限りにおいてはね。

（質問者H）じゃあ、そういう可能性もあるということですか。

（尊師）それは、あります。可能性はあります。

（質問者H）それで、今自分がやらなきゃいけないことは、ワークと六百時間の立位礼拝の修行があるんですけど、その割り振りがちょっとよくわからないんです。まあワークに集中すれば一日中やってられるんですけど、でも立位礼拝もやらなくちゃいけないかなとか思うんですが、そういう割り振りについてはどういうふうに考えたらいいんでしょうか。

（尊師）それはコンディションを見てやったらいいと思う。ただ、ま、Kさんの今の心の状態を見ていると、まだ内側にプラーナが充実している状態ではない。個人的なちょっとアドバイスをさせてもらうけどもね。やっぱり、少し心の内側に寂しさというか、根本的な悲しみみたいなものをわたしは持っていると思うんだよ。で、それが結局まあ、サマナ入りを遅らせた原因だとも思うし、それからもう一つ、これからのあなたが、ラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガ、マ

ハー・ムドラーと上がっていくための一つの障害でもあるんじゃないかと思うんだね。

だから、逆に大乗の心を持って、そして、その悲しみというか、根本的心の空虚さみたいなものをつぶすような「大乗の発願」だとか、あるいは「苦の詞章」だとか、あるいは「シッシャの心得」だとかこのようなものを徹底的になせば成就は早められると、わたしは思います。

◉寂しさの裏にあるものを見抜く

（質問者Ｉ）Ｋです。個人的な精神的なことなんですけども、昔からいつも心の中に寂しさというのがあって、何か問題に当たる場合にすぐにその寂しさというのに引っかかってしまうんですけども、どういうふうにして解決したらいいんでしょうか。

（尊師）なぜ寂しいと思うか。

（質問者Ｉ）根本的に愛情欲求があって、人に愛されたいと思うからなんじゃないかと思うんですが。

（尊師）しかし、愛されたとしてその欲求が満足するか。

（質問者Ｉ）一時的にはそのような気がしても、永遠のものではないと頭では思うんですが……。

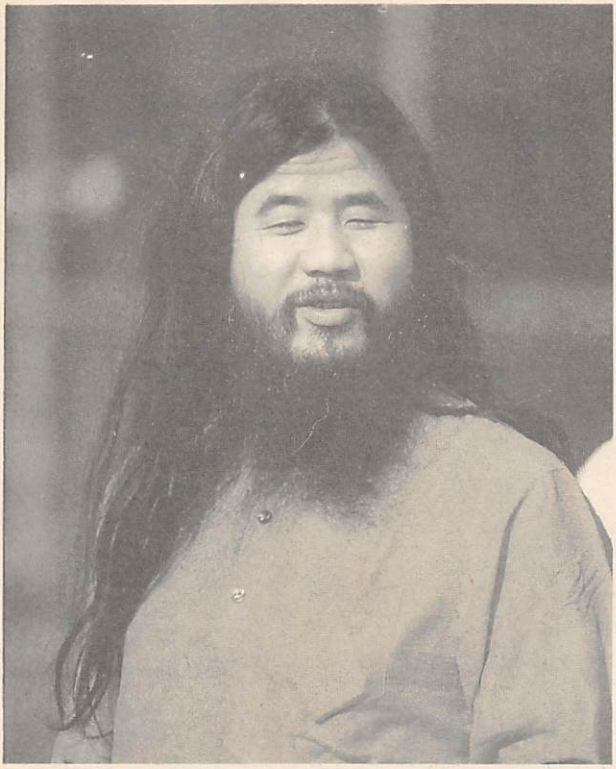
（尊師）Ｋさん、今までお付き合いしたことは？

（質問者Ｉ）あります。

（尊師）じゃあ、なぜやめた。一時的にそれが満足できる状態だったらやめる必要はなかったんじゃないか？

（質問者Ｉ）はい。

（尊師）君の心の寂しさの背景にあるものは、心の本質が無常だということを知っているからだよ。すべては移り変わるものであると。



だから、君自体がもっと厳しいワークに入ってね、ほんとに自分を厳しく見つめ、厳しいワークに入って、そして厳しく修行し、君が例えばクンダリニー・ヨーガの解脱をすると、例えばマハー・ムドラーの成就をするとするならば、そのときに寂しさは消えます。だから、君の寂しさは解脱するまで消えないだろうね。そしてその寂しさがある限り、君は修行者です。大切にしなさい。

（質問者Ｉ）はい、ありがとうございました。

◉心身を改善する教えを伝授

（質問者Ｊ）個人的なことで申し訳ないんですが、わたしもともと持病でアトピー性皮膚炎があるんですけども、それが今かなり悪化しているんです。本当に、外的な条件によって完全に心の方が引きずり回されていて、ワークもほとんどこなせてないんですが。

（尊師）K君の場合は、もともと心が弱いんだね。

（質問者J）はい、そうです。

（尊師）だから、その心を強くする訓練をしなければ。だって、今の心の状態で死んだら間違いなく、大変な苦しみを味わうことになるわけだから、それはもう考えなきゃなんないだろうね。そしてこれは、やはり「オウム真理教附属医院」に行って、十分に治療をするべきだとわたしは思います。

（質問者J）はい。とにかくこれを治さない限りは……。

（尊師）ただね、K君。一言言えることは、その病が治ったとしても、君の心は治らないだろう。それは君自体が、自分のエゴイスティックなわがままさっていうのかな、それを克服しない限り不可能であるということだね。

（質問者J）そう思います。

（尊師）だから、それがポイントになってくると思うよ。じゃあ、何をやればいいんだといったら、とにかく暇があればマントラを唱えるとか、精神を集中する

とか、そういうことを行ないながら身体を治していくべきじゃないかと思います。

（質問者J）そのとおりだと思います。

（尊師）いいね。

（質問者J）はい。ありがとうございます。

◉エネルギーの状態を見通す

（質問者K）修行班のMですけども、今すごく餓鬼のカルマが出てるんですね。今日なんかずーっと食べ物のことを考えていて、トーストとか、大福餅とか、そういう甘いものを食べたくてたまらなくなっているんです（※集中的な瞑想修行に入る者は、修行の妨げになるために甘いものは原則的に取ってはならないことになっている）。

（尊師）まず、Mの場合は、アナハタ・チャクラの卑屈、ここで今、結があるん

だね。それによって、火元素が風元素に還元されないで苦しんでいます。ですから、食べ物に対してはKにアドバイスしたもので十分です。それよりも卑屈さ、それから心のけがれ、ね、これだけをポイントとして絞り込んで、アナハタをとにかく解放することだけに集中して修行を続けてごらん。

（質問者K）四カ月も修行に入っているんですが。

（尊師）いいですか。仏陀釈迦牟尼（ぶっだしゃかむに）のケーマー比丘尼、ね、大慧第一（だいえだいいち）といわれているケーマー比丘尼ですら、七カ月とも九カ月ともいえる修行をなさったわけです。彼女の経験は第一天界から第六天界までの経験でした。ましていわんや、Mはスヴァディスターナ、アナハタというこの二つで引っかかっているわけですから、当然長きにわたって無智、それから卑屈といったものを止滅することが大切です。下のチャクラであればあるほど時間がかかります。わかるかな。

だから、たったの四カ月だと考えなさい。あなたが成就するまでわたしは付き合うつもりでいますから。ま、極端な言い方をすれば、五年でも十年でもかかっ

ても未来における長きにわたる楽に比べたら短いもんです。

そしてね、M、もう一つ言いたいことは、過去を振り返ってはいけない。未来を見てはいけない。これは仏教の修行の根本です。つまり今日、この瞬間だけを集中して修行するようにしなさい。

（質問者K）また、同じことを言っちゃうみたいですけども、このごろすごく惛眠（こんみん）に陥ってしまうんです。アパンクリヤやってても、前半の三時間はまあできるんですが、その後ずっと寝てしまうんですが。

（尊師）だからね、M、わたしは今何と言いましたか。動物の無智とそれからアナハタの卑屈の二つを修習していると言ったよね。ということは、無智というのは、これは本能的無智だから当然寝ますよね。そして、修行もしたくないと思いますよね。その二つを克服すること、それから今言った卑屈を克服することが、あなたが輪廻転生の次の生において高い世界へ生まれ変わる要因になるわけだから、ここで克服するしかないよ、それは。で、時間がかかるものは時間がかかる

んだよ。

それは例えばね、こう考えてごらん、ここに十トントラック一杯のゴミがあると。あるいは、一リットルのペットボトルぐらいの量のゴミがあると。この二つのゴミをね、同じ時間で焼き切ることができるだろうかと。できないよね。それは。それと同じように、今まで煩悩の修習を行なってきたものと、煩悩を滅尽しようと思って修行してきたものとの煩悩の消滅の時間というのは違ってくるわけだよ。

しかしね、M、十トントラック一杯のゴミにしろ、ペットボトル一本のゴミにしろ、大きな時の流れから見たら、大した時間をかけなくて焼き切ることができるんです。わかるよね。あなたが本当に幸福になるためには、無智を脱却し、卑屈を脱却すると。それをなすことによって、あなたの食の苦しみというのは消えます。いいね。

（質問者K）はい、わかりました。ありがとうございました。

◉心が発する光を見る

（質問者L）修行班のKです。やっぱりわたしも修行に入って、自己のけがれた部分が出てきまして、自分の行為、行動がぐちゃぐちゃなってしまったんです。で、これは駄目だなっと思って、一日の反省ということで、いろいろな自分の悪い行為というのを日記みたいに書いてたりするんですけど、自分のその反省っていうのが全然生かされないんですよ。また、同じ過ちを繰り返してしまうんです。

自分の反省が生かされて、その自分の悪い行為とか考えとかそういうのを正せるようにするにはどうしたらいいかということをお聞きしたいんですが。

（尊師）それは無理だ。そのために何かというと、先程言った詞を使うんだね。つまりどういうことかというと、例えば自分の反省点があったとしましょうと。例えば今の君のバルドーの場合は、黄色、緑といった要素があるから、おそらく今苦しんでいるのは無智とそれから貪りだろうと思います。

（質問者L）はい。

（尊師）特に、今貪りが強いんじゃないかと思うんだけど――これはバルドーの光で今言っているんだけどね――その無智と貪りという二つの要素があったとして、じゃあ、例えば貪りに対しては貪りの瞑想があるじゃないかと、無智に対しては無智の瞑想があるじゃないかということで、それをひたすらやり続けると。

特に深い意識状態に根づいているものだから、それを例えば表層に比べて深く潜れば潜るほど時間がかかるわけだよね。それを意識すれば必ず改善されるよ。そうでなくて、小手先に今日反省したことを明日何とかしようとしてもそれは無理です。

（質問者L）貪りを取る瞑想というのは、やっぱりツァンダリーの瞑想とかそういうものですか。

（尊師）貪り専門の瞑想があるから、それをやるべきだと思う。ま、今まず、君がやんなきゃなんないのは、わたしは欲如意足（よくにょいそく）をひたすらやるべきだと思うね。

それもひたすら欲如意足をやるということと、あと食の厭逆と。この二つをやればいいんじゃないかと思います。

（質問者L）それから、衝動的に破戒をしてしまうんですが、これはやっぱりかなり深くその煩悩が根づいているんでしょうか。

（尊師）いやあ、特に君の貪り、無智っていうのはものすごい強い光を発しているからこれは根強いと思います。つまりこれは言い方を換えれば、君が動物の世界と餓鬼の世界とに多くつながってて、特に餓鬼の世界とつながってることを表わしているから、それを今ここで切ってしまうということは仏教のもともと本質である、下分結の悪趣に至る道を切ることになるから大きなメリットになると思う。逆の言い方をすれば、破戒して当然であると。それだけ強い光を発しているわけだけから、そう考えればいいね。

（質問者L）わかりました。

◉心の揺らぎを見て取る

（質問者M） Sです。この度の事故で、尊師にわたしはだいぶご迷惑をおかけしてしまいまして、本当に申し訳ございませんでした。

事故を起こしてしまったというわたし自身のカルマというものが一体何に由来するのか、そして今回積み上げてしまったカルマといったものが、いかほどあるものなのかということを尊師にお聞きしたいんですけども。

（尊師） わたしがそれに対して、Sから手紙を受け取ったり、いろいろして、ノーコメントだった理由というのはね、それを答えてもしょうがないということなんだよ。それはなぜかというと、Sのものの見方にズレがあると、結論から言うと。わかるかな。

だからもっと、そういう自己の瞬間的なカルマを見つめるんではなくて、全体的な心の働きを見つめ、自分の屈折してる意識状態、これをね、早く回復するこ

とがわたしは先だと考えているわけです。

実は、この事故の因というのは、もう既に一年前に生じていたということがいえると思う。それは、君の帰依の揺らぎとかそういうものがあったよね。

（質問者M）はい。

（尊師）わかるかな、言ってることは。

（質問者M）ええ、わかります。

（尊師）そこらへんが原因しているんです、結論からいうと。本来だったら事故を起こさなくて済んだはずなのに。やっぱり帰依の揺らぎというものが現象化したというふうに考えたらいいよ。

つまり、こういうことだ。過去世で多くの悪業を積み、カルマをつくってしまっているけど、真理の法の実践によってそれが軽減されているというわけだ、要するに。それが、心が揺らいでくるとどうなる。

（質問者M）その揺らぎがもとになって現象化するということですか。

（尊師）だよね。ということだよ。

（質問者M）それで、事故の結果ですね、積んでしまったカルマっていうのはどのぐらいのものがあると考えたらいいんでしょうか。

（尊師）いや、わたしはプラスに働いたと考えているけど。というのは、君はそれによって自分の心を一生懸命見つめようとし出したと。現に今は、あなたが事故を起こす前より心は平静になっていると。じゃないか。

（質問者M）まあ、幾分かはなってるかと思います。

（尊師）でしょ。つまり、本当に弟子というものは、ね、帰依をしようとしていれば自分の内側を見つめるチャンスに巡り合うわけだよ。わかりますか。

（質問者M）はい、わかります。

（尊師）今回は、だからそのための機会であったと考えるべきだと思いますね。わかるかな、言っていることは。

（質問者M）はい、わかります。

（尊師）だから、こういうふうに考えなさい。あなたがなした今までの功徳が現象化した、悪業が現象化したと。すべての現象は功徳の部分と悪業の部分があるから。わかるよね。

だから、その悪業の部分だけ見つめるんじゃなくて、功徳の部分も見つめると。で、功徳の部分を有効に生かし、悪業の部分についてはザンゲすればいいじゃないか。そこで後悔する必要もないし。なぜかといったら、その現象は過去と過去世のカルマの総合がね、その時点、時点のカルマでしょ。

だから、わたしたちはどうすることもできないんだよ、それについては。だからひたすら、過去と過去世のカルマをザンゲし、今瞬間瞬間、善業を積み続けるということが修行を達成するただ一つの道だというのがわたしの今の考えです。

（質問者M）ありがとうございました。

（尊師）いいね。

◉雑念の渦から脱却する法を伝授

（**質問者N**）個人的なことなんですけどよろしいでしょうか。最近、最近といってもここ数日なんですけど、えらく雑念が多くて心が散動状態にあるんです。なかなか集中ができなくて……。

（**尊師**）まず、雑念があるということが認識できてるだけすごいよ、それは。だから次にやらなきゃなんないことは、多分君の場合、ワークの他に座る時間があると思うから、その座っている時間に何の雑念が出てきているのかと、それをしっかりとまず押さえなさい。

第二の段階でその雑念に対して、教えはどうなっているのかをメモしておいてね、教学テキストを引っ張り出してきて、何回も何回も繰り返し記憶修習しなさい。そして、次のステップでは座った段階でその浮いてきた雑念に対して教学のデータをぶつけなさい。それを繰り返していってごらん。

（質問者N）ただ以前、確か八九年の四月二十一日の説法のときに受けられた質問のお答えで、浮いてくる雑念はほっといて、今やらなければならないことに集中するようにと言われてたんですが……。

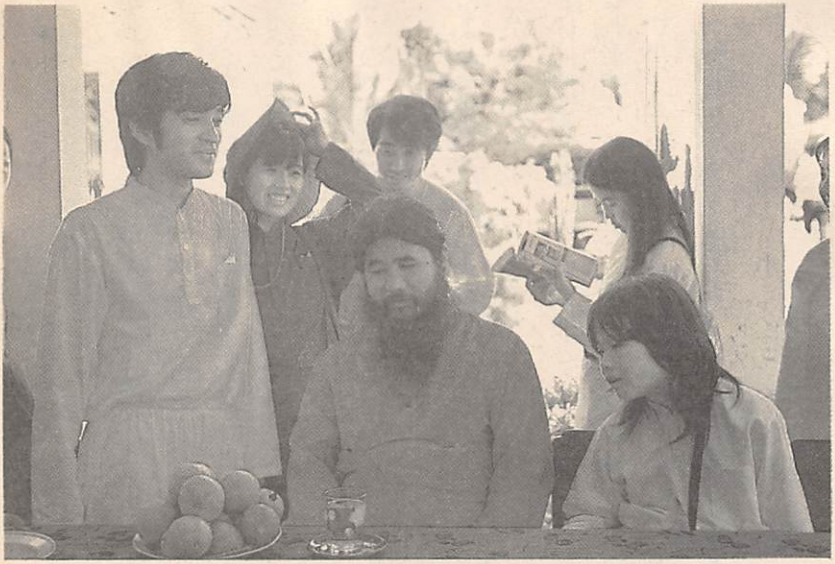
（尊師）今言っているのは、それより――つまり、クンダリニー・ヨーガからもう一歩進んだマハー・ムドラーの修行の方法でしょ。つまり、よりテクニカルな方法なんだよ。それは、君が少しずつ教学をしているから、その方法をやりなさいと言ってるわけ。

（質問者N）あの、その教学の点なんですけど、もう一つ質問しようと思っていたんですが、なかなか教学ができないんです。もともと勉強が嫌いなもので……。

説法テープを聞いていても、ほとんど睡眠学習と聞き流しというような状態なんですね。そして、聞き流しといっても機械の音で聞こえないという……。

（尊師）でも、それはワークは集中してるわけだよね。

（質問者N）集中しようとしてるんですが、雑念が多いんです。



（尊師）いや、だからね、それでいいんだよ。先程言ったとおり、だからわたしはテープと言わず、テキストと言ったんだよ。テキストを拾い上げて、自分の雑念の項目を探してそこを読むと。何度も何度も読むと。そして座りなさいと言ってるんだ。で、浮いてきた雑念に対してそれをぶつけなさいと。わかるかな、言ってることは。

（質問者N）ほっとくのではなくて……。

（尊師）そうです。

（質問者N）それによって雑念は落ちるんでしょうか。

（尊師）そちらの方が早いんです。テクニカルだけどね。

（質問者N）ほっとけば消えるというのは何となく実感としてわかるんですが、雑念に対してあれこれ考えて落とすというのはまだ経験が……。

（尊師）いいかな、V君。一秒で消えます、雑念は。まあ、少なくとも三秒で消えないようではそれは集中力がないといえます。雑念というのはね、一、二、三

で消えるんです。思索をすれば。

（質問者N）それは心で納得して消えるんでしょうか。

（尊師）そうです。

（質問者N）しかし、その浮いてくるデータに対して、そのデータに没入してしまうんです……。

（尊師）だからV君、もう一度言うよ。しっかりとまず浮いてくるデータをメモする。第二段階で、その浮いてきたデータに対する答えを教えによって探す。第三段階で、意識のあるときにそれを記憶修習する。第四段階で、次に浮いてきたときにその記憶修習したものをぶつけると。これをやりなさい。この四段階のステップでやりなさい。いいね。

（質問者N）わかりました。それから、もともとわたし、寝るのが一番好きなんですけども、これは……。

（尊師）寝るのは雑念の多いのと同じです、それは。そういう雑念が多い、イコー

ル眠りが多いと考えなさい。

（質問者N）心が弱いからということでしょうか。

（尊師）心がというよりも、心の本質がデータによってけがされているんだよ。だから眠りが多くなるんです。だから今の瞑想を続けなさい。一、二、三、四、いいね。

（質問者N）はい、わかりました。

◉現象の背景にあるものを見る

（質問者O）最近広報編集の師が新しい原稿のプリントアウトをシステムでされるわけなんですけども、それを何度かハードディスクにコピーした後、盗み見してたりしてたんです。そのことと、今教学してるとすぐ寝てしまい、全然教学できなくなっている状態っていうのは関係があるんでしょうか。

（尊師）広報編集の何を盗み見するんだ。

（質問者O）『タターガタ・アビダンマ』（オウム真理教の経典の一つ）。

（尊師）『タターガタ・アビダンマ』の？

（質問者O）それを打ち出したものを自分で読んでたりとかしていたんです。まだ出版されていないときに。

（尊師）あ、それは寝る原因と関係ある。理由は、後ろめたい気持ちで読んでんじゃないか。

（質問者O）はい、非常に後ろめたい気持ちで。

（尊師）それが原因だ。隠そう隠そうとする心の働きが無智にさせてるんだよ。だから、それは堂々と読めばいいよ。

（質問者O）あ、読んでも構わないんですか。

（尊師）別にそれは構わないんじゃないか。

（質問者O）あとそれから、尊師への帰依の証として一生懸命ワークしようと思

うんですけども、オウム入ってからずっとそうなんですが、なかなか集中できないんです。どのようにしたらいいでしょうか。

（尊師） どういうふうに集中できないか。

（質問者O） 例えば、作らなきゃならないプログラムがあるとしたら、だいたいいつもいったん作り出すとわりと集中できるようになっていくんですが、その前が駄目なんです。

（尊師） わかった。いいか、K。それについては、わたしもそういう現象があるんだけど、そういうときは座って、いいか、心を静めて記憶修習しろ。これを今日ここまでやんなきゃいけないとか、これをこうどうしなきゃいけないと。わたしはよくそれをやる。それをやることによって、今の肉体を動かすことができる。だからそれをやりなさい。つまり座って集中して、何度も何度も心の深い部分に刻み込むというかね、それをやりなさい。

（質問者O） はい、わかりました。どうもありがとうございます。

◉気の通り道を見る

（質問者P）最近、立位礼拝とか瞑想の後にワークをすると、すぐ眠くなってしまって、ワークに支障が出てしまうんですが、それを解消する方法というのがあれば教えていただきたいんですが。

（尊師）まずね、N君はネーティをやっているかな。

（質問者P）いえ、やっていません。

（尊師）ネーティをやってごらん。多分ね、左の気道が通り出して上の管が詰まっているから眠気が出ているんだと思います。だから、少し多めにネーティをやると眠気は消えると思います。

（質問者P）はい、わかりました。ありがとうございます。

◉霊的状態を見る

（質問者Q）ワークをやっているつもりだったのに、ハッと気が付くと眠っているような状態で全然やっていなかったりとかいうことが最近頻繁にあるんですが、それを抑える方法はあるんでしょうか。

（尊師）それは簡単だ。それは、空のエレメントに色が負けている状態だね。だから、夢かうつつか幻かと。その状態を成就だという人もいるけど、わたしはそれは単なる混沌意識といわれている意識状態の根本意識の一つがあるわけだけれど、そこに没入している状態だと思う。それは、結果的には解脱を生まないから、もっと強い意志を持つべきだね。やっぱり、それは意志の力が弱いんだと思うね。

つまり、混沌意識というのは言い方を換えればタマスだ。タマス優位だということだね。だから、自分でここまでにこうすると言ったことは死んでもやると。例えば、そこで本当に生命が途絶えてもやるぐらいの強い意志を持ってやってご

らん。消えていくから。

（質問者Q）わかりました。

（尊師）その次のステップで、成就に向かうだろう。いいね。

（質問者Q）はい。

◉壁をぶち破る法を伝授

（質問者R）もし、以前に自分の壁に体当たりして失敗したというようなことがあった場合、次にトライするときにですね、否定的想念を持たないようにするにはどのようにすればいいんでしょうか。

（尊師）あのね、一回トライして駄目、二回トライして駄目、三回トライして駄目でもいいんだよ。なぜかというと、一回目に全力でぶつかったならば、二回目は一回目のレベルまでは行けるだろう。行けないか。

（質問者R）はい。

（尊師）うん、行けるだろう。そこから、もう一歩、もう二歩の努力はできると思わないか。一回目駄目だったということは、二回目のための準備にはなっているよね、進むための。

ところが、そこで無智というものが加わってくると、一回目駄目だったからといって、もう二回目その行為をなそうとしないんだよ。ここに大きな違いがあるわけだね。わかるよね、言っていることは。

だからポイントは駄目でもともと。つまりどういうことかというと、初めから破ることはできないと。しかし、破ることはできなくても、全力でぶつかることが大切なんだと。そして、それがわたしたちの修行なんだよ。

そして、個々のカルマの力はあるけども、例えば三回、五回、十回とやっているうちに、必ず破れる。破れない壁はないと、そう考えていい。要はね、三回であきらめるか、五回であきらめるか、あるいは十回であきらめるかだ。そして、

あきらめない人は必ず成就する。もちろんセオリーとして、正しくないセオリーだったら結果は出ないだろう。しかし、もう先輩たちが出ているわけだよね。一つのステージ、一つのステージに対して。だとしたならば、必ずその道はあるんだと。

例えば、N君の場合は、強い意志の力を持っているから、あとはそうだね、逃げの心が出ないことだね。逃げの心がね。一回ぶつかって、そのあと、逃げの心が出ないこと。駄目だったら、一回下がったとしても、もう一回トライすると、もう二回トライすると、もう三回トライするようにしてごらん。必ず壁は破れるから。

だから、ポイントはそこでトライする気持ちがなくなるか、なくならないかだ。でね、こう考えたらいい。否定的想念がわいてきたとき、自分は楽をしようとしていると。というのは、否定的想念というのは、行の停止を生むよね。動きの停止を生むよね。そうでしょ。で、楽によって結果は得られないと。それを絶えず

念じ続けてごらん。自分は、意図的に苦しい方を選択するんだと。いいね。

（質問者R）わかりました。ありがとうございました。

あなたの持っている本当の力

超越神力

ちょうえつじんりき

麻原彰晃 著

各刊 B6判 980円

麻原彰晃尊師の神秘をあますところなく公開!!

人の魂に宿っている不思議な力——
それを発現させるものを修行という。
多くの弟子たちが獲得した神通力の紹介を交えて、
最終解脱者、麻原尊師の神秘力を明かす!

PART-1
天耳通・他心通

神々の声や遠くの音を聞くことのできる天耳通。他人の心を手に取るように読んでしまう他心通。今明らかになるこの超越神力のすべて。あなたもこの素晴らしい力を持つことができる。

PART-2
宿命通
前生を知れ! 死生智の秘密

無始の過去から輪廻転生を繰り返しているわたしたちの魂。瞑想によってサマディ（三昧）に入ったとき、様々な前生の記憶が甦る。本書では麻原彰晃尊師の興味深い前生を満載。

超能力 秘密の開発法

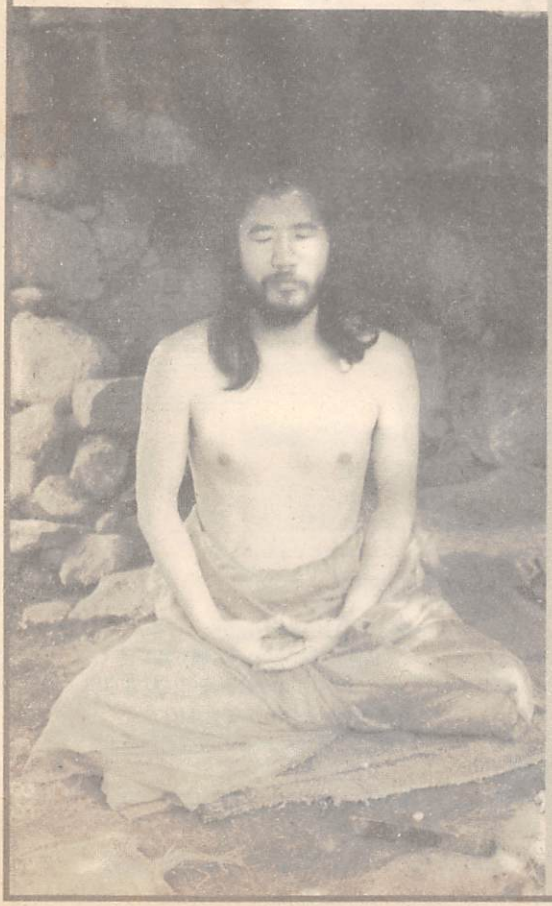
人が修行によって"人間"を
超えようとするとき、
必ず人知を超えた"力"が身につく。
超能力のつかない修行などニセモノだ！
日本でただ一人の最終解脱者、
麻原彰晃が贈る究極の秘儀伝授。

B6判／320ページ
定価980円（本体951円）

お近くの書店にてお求めください。なお、直接弊社にお申し込みの場合は下記までお問い合わせください。

オウム出版
本　社　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17　TEL 03（3439）6043　振替2-109325
営業部　〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL 03（5370）1598

麻原彰晃のザ・サマディ
THE SAMADHI



サマディ——それは真の解脱者のみが行ない得る奇跡。彼らが深い瞑想状態に入るとき、呼吸は完全に停止する。生死を超えた瞬間、彼らの見た世界とは？
麻原彰晃尊師が現代の神秘「サマディ」のすべてを明かす！

定価1200円
A4変形判 オールカラー

● ご注文は書店にお願いします。
● 直接弊社にお申し込みの場合は、下記までご連絡ください。

オウム出版

（本　社）〒154 東京都世田谷区
世田谷2-8-17
TEL 03 (3439) 6043
（営業部）〒168 東京都杉並区
宮前3-8-11
TEL 03 (5370) 1598

笑顔の明日を予感させるライフクリエートマガジン

Enjoy Happiness

えんじょい・はぴねす

月刊『えんじょい・はぴねす』

――主な内容――

◆Voice of Buddha
最終解脱者が贈る幸福メッセージ
「光を超えて――えんじょい・はぴねす」
麻原彰晃尊師

◆Special Lecture
精神世界ファン必読の特別講義！
「宗教は一つの道」 麻原彰晃尊師

◆JĀTAKA Stories
「仏陀釈迦牟尼からの贈り物
――釈迦牟尼の輪廻転生に見る真実」

◆Science and Truth
仏教の真理を科学の視点で斬る！
「真理を科学する」

◆あなたもわたしも創造主

などなど、他の雑誌では絶対に見られない興味深い情報が満載！

「幸せになりたい！
でも、信徒になるのはちょっと……」
そんなあなたに贈る
最高のプレゼント！

『えんじょい・はぴねす』の定期講読を申し込まれた方は、様々な特典が受けられる〝EH会員〟になることができます。EH会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できますし、全国や海外の本部・支部をいつでも利用できます。お気軽にオウムをのぞいてみませんか？

特典の一部を紹介すると……

- ◉オウム主催のイベント、説法会等へ自由に参加可。
- ◉幸福情報を満載したEH会員手帳をもれなくプレゼント！
- ◉成就者との対面および電話による悩み相談。
- ◉各種販売物を信徒価格で購入可。

〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（EH会員）になるには？

※入会金無料。月刊『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申込み、料金の払い込みが確認されるとEH会員となります。
なお、定期購読の申込みは6カ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教本部・支部までお問い合わせください。

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

好評！あなたとオウムをつなぐ パソコン通信、"オウム真理教ネット"

面倒くさい手続きは一切ありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

"オウム真理教ネット"のご紹介

TEL番号	03-5370-1726
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BITS-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、SYSOPあてメールにて申請

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。

〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
"オウム真理教ネット"事務局
TEL 03-3335-4965

最高の智慧、神をも超えた力……
最終解脱者があなたを変える！

オウム真理教

その修行ステージの高さゆえ、
〝イエシェ――完全なる絶対なる神の叡智〟
とチベット仏教の高僧より称えられる
麻原彰晃尊師。
最高の智慧と神通力を有した
日本でただ一人の最終解脱者です。
その麻原尊師が、
あなたに贈る幸福へのプログラム。
病から解放されたい……
最高の幸福を得たい……
解脱と悟りを得、神通力を
ほしいままにしたい……
こんなあなたの願いを、
麻原尊師が仏教・ヨーガ・密教の
あらゆる秘儀を駆使して、
速やかにそして確実にかなえます。

※資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

PART 3
資料請求券

◆各道場のご案内◆

富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場）03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市荒場441-8
渋谷出張所　03（3476）5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号

〈海外支部〉

ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.＃2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

超越神力PART３（完全なる絶対なる神の叡智、漏尽通）
――あなたの持っている本当の力
1991年12月21日　初版発行
定　価　550円（本体534円）
発行者　松本知子　石井久子
編　集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
〒154 東京都世田谷区世田谷2―8―17
電話　03（3439）6043　振替　東京2―109325
©Shoko Asahara 1991
ISBN4―900497―96―7　C0014　P550E
※乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

超越神力

PART 3

完全なる絶対なる神の叡智、漏尽通

麻原彰晃

ISBN4-900497-96-7 C0014 P550E 定価550円(本体534円)